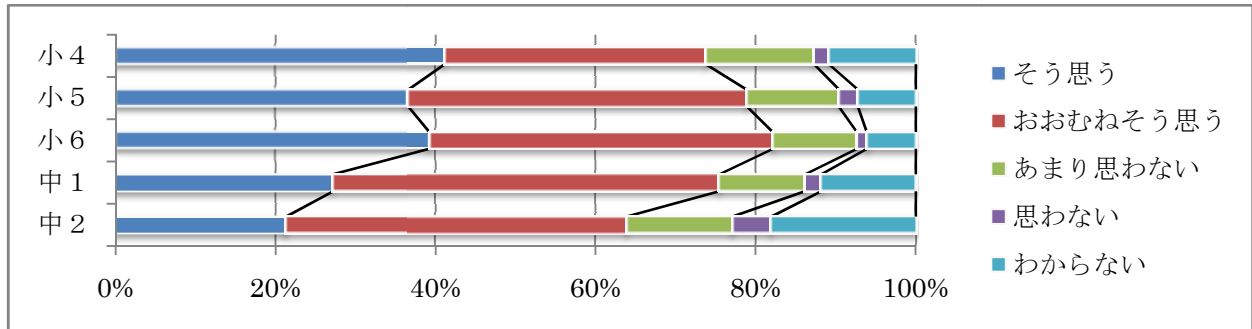


アンケート結果

1 本市の小中一貫教育のねらい（7項目）に係る内容について

1-1 「9年間を見通した系統的・継続的な学習指導」についての意識

児童生徒 授業はこれまで習ったことやこれから習うことにもふれて進められていると思う。

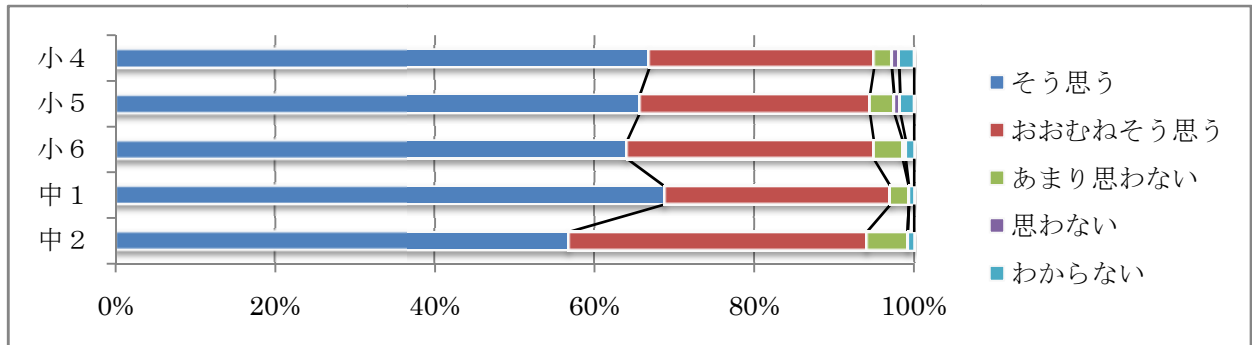


*児童生徒は6割以上が「そう思う」「おおむねそう思う」と肯定的に回答している。

【児童生徒】

○小学校6年生は中学校進学を控えた時期であり、教員が上学年、下学年の学習内容を意識して進めていることが伺える。

保護者 授業でこれまで習ったことや今後習う事にもふれるなど、学習内容のつながりを意識してほしいと思う。

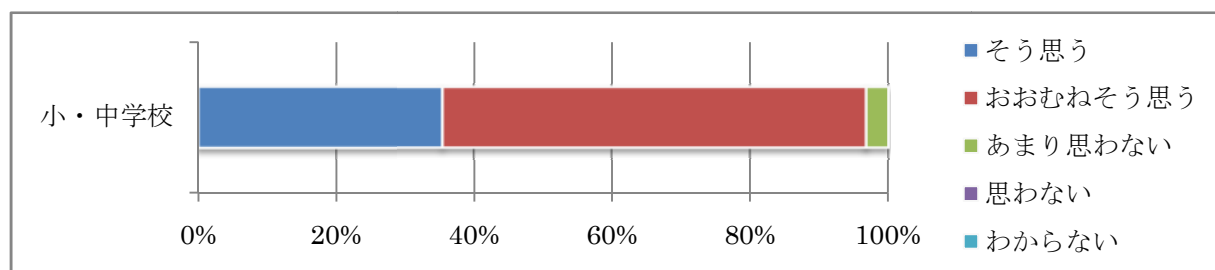


*9割以上の保護者が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【保護者】

○保護者はいずれの学年においても、学校の学習内容のつながりを意識した指導を進めることに期待を寄せており、学年による保護者の意識はあまり変わっていないことが伺える。

学校 小中一貫教育の試行により、9年間を見通した系統的・継続的な学習指導を意識するようになった。



＊9割以上の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

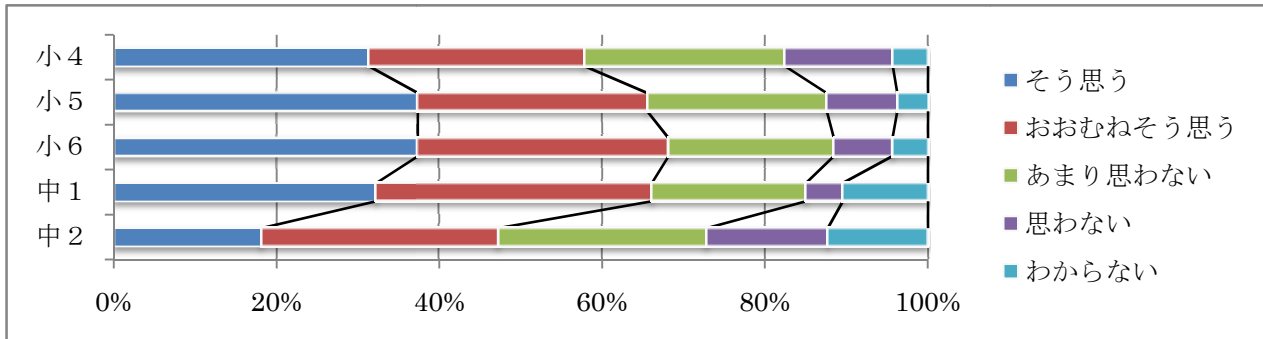
○試行により、9割以上の学校が9年間を見通した系統的・継続的な学習指導を意識するようになっていることが伺える。

調査した児童生徒の6割以上が「授業はこれまでに習ったことやこれから習うことにもふれて進められていると思う」の設問に「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。小学校6年生は8割以上が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答しているが、中学生では低くなり、中学校2年生では6割程度まで低くなっている。また、保護者は9割以上が「授業でこれまで習った事や今後習う事にもふれるなど、学習内容のつながりを意識してほしいと思う」と回答するなど、小・中学校の学習内容のつながりを意識した教科指導に期待を寄せている。

今後も、「義務教育9年間の円滑な接続に配慮した『義務教育9年間を見通すことのできる』年間指導計画」[宇治スタンダード]に基づいた系統的・継続的な学習指導を一層充実することが求められている。

1-2 「9年間を見通した系統的・継続的な生徒指導」についての意識

児童生徒 担任の先生だけでなく、他の学級や学年の先生など多くの先生と話したりすることが多くなっていると思う。〔小学校〕
担任の先生だけでなく、他の学級・学年の先生や小学校の先生など多くの先生とかわることが多くなっていると思う。〔中学校〕



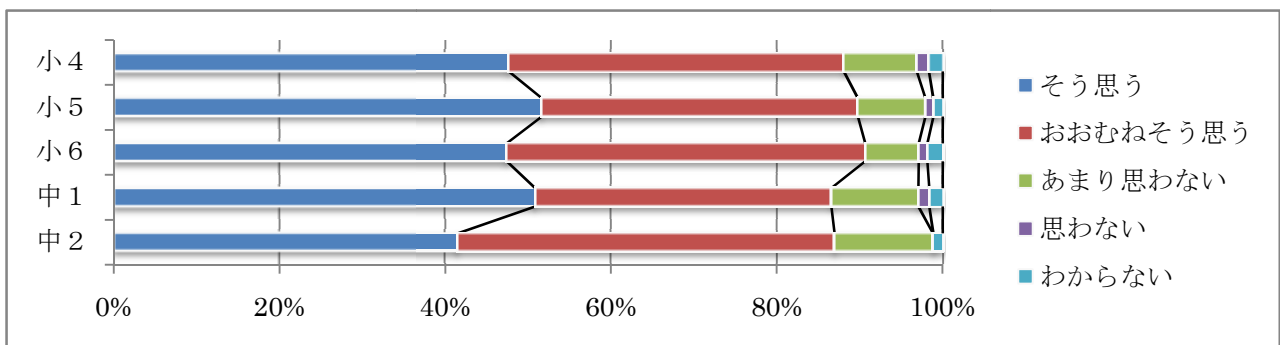
*小学校4年生から中学校1年生は6割から7割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と肯定的に回答している。

*中学校2年生では「そう思う」「おおむねそう思う」と肯定的に回答する割合が低くなり、5割を下回っている。

【児童生徒】

○小学校高学年では、多くの教員にかかわってもらっている意識が強いことが伺える。このことは、一部教科担当制や中学校教員の乗り入れ授業（指導）など学級担任以外の教員とのかわりが多くなっていることが判断の要因になっていると思われる。

保護者 担任や学年の先生に限らず、他学年の先生など多くの先生と我が子のかかわりを持つようになってほしいと思う。



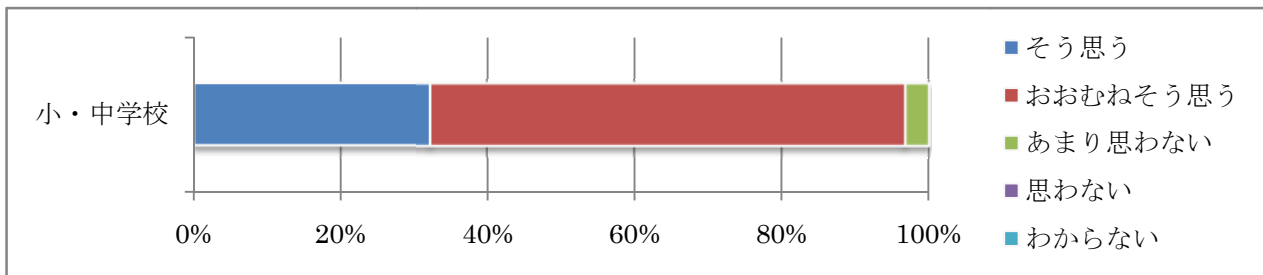
*すべての学年の保護者とも9割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【保護者】

○いずれの学年の保護者においても、多くの先生が子どもとかわりを持つようになることに期待を寄せていることが伺える。

○学年進行による明らかな差はなく、保護者としての共通した期待であると伺える。

学校 小中一貫教育の試行により、9年間を見通した系統的・継続的な生徒指導を意識するようになった。



* 9割以上の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○試行により、9割以上の学校が9年間を見通した系統的・継続的な生徒指導の重要性を認識し、互いに意識し連携を心がけるようになってきたことがわかる。

小学校4年生から中学校1年生は6割以上が担任の先生だけでなく他の学級や学年の先生など多くの先生とかわることが多くなったとしている。

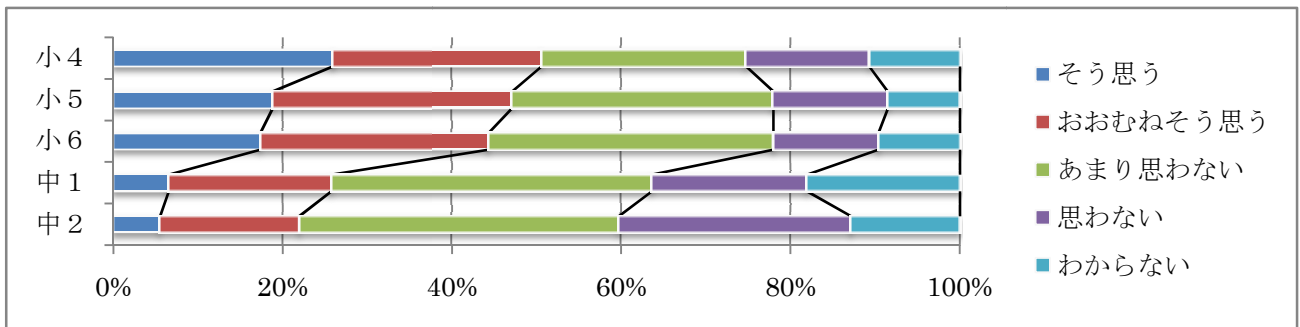
また、保護者は9割程度が担任や学年の先生に限らず他学年の先生など多くの先生と我が子とかわりを持つようになってほしいと期待している。

現在、小学校高学年で学級担任間の交換授業や中学校教員の小学校への乗り入れ授業など一部教科担当制をとり入れたり、合同学習や合同行事などを行ったりすることにより、一人の児童に対して多くの教員がかわるようになっている。

今後も、9年間を見通した系統的・継続的な生徒指導を進めるために取組方法などを工夫していくことが必要である。

1-3 「9年間を見通し、地域に根ざした特色ある教育活動」についての意識

児童生徒 地域を知ったり、地域の人たちといっしょに活動したりする学習が多くなっていると思う。

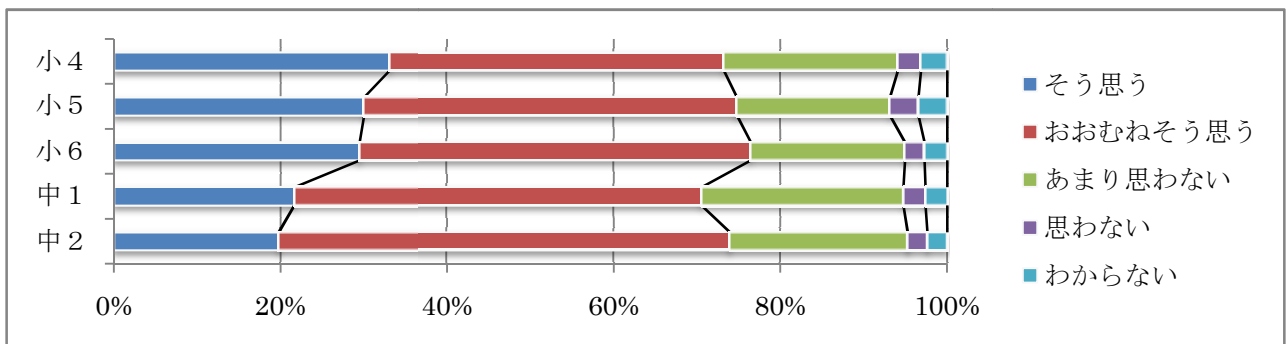


*小学生は4割から5割程度が「思う」「おおむねそう思う」と回答しているが、中学生では2割程度と大幅に低くなっている。

【児童生徒】

- 学年が上がるにつれて、地域にかかわる学習、地域の人と一緒に活動する学習が少なくなっている実態が伺える。
- 小学校4年まではどちらかというと体験すること自体がねらいの中心であるが、学年が上がるにつれ、学習のねらいを達成するための1つの方法として体験活動が位置づけられることが多くなってくる。地域を知ったり、地域の人たちといっしょに活動したりする中で得た経験を、自分の生活に戻して考えることが今の子どもたちには重要ではないかと思われる。

保護者 地域の方を先生として招いたり校区の良さを知る活動など、地域と結びついた教育活動を計画的に行ってほしいと思う。

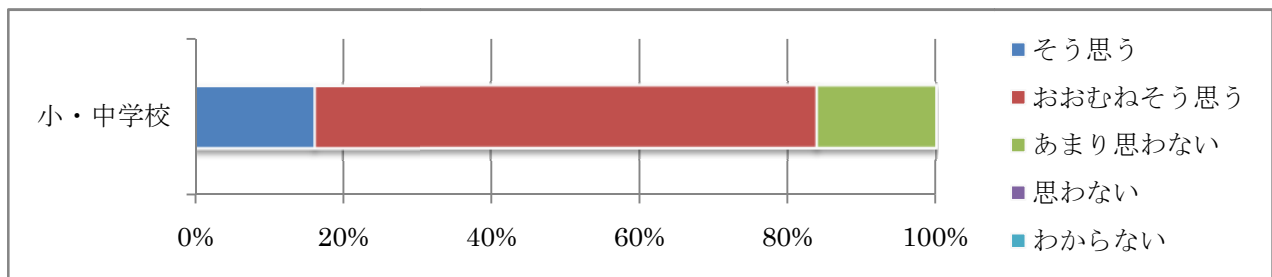


*すべての学年において「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した保護者は7割以上となっている。

【保護者】

- 地域と結びついた計画的な教育活動の必要性を感じていることが伺える。

学校 小中一貫教育の試行により、9年間を見通し、地域に根ざした特色ある教育活動を行うようになった。



* 8割以上の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ほとんどの学校が地域社会との繋がりを重要視し、義務教育9年間を見通した、そして地域に根ざした特色ある教育活動を行うようになってきたことが伺える。

8割以上の学校が地域社会との繋がりを重要視し、地域に根ざした特色ある教育活動を行うようになってきているとしている。

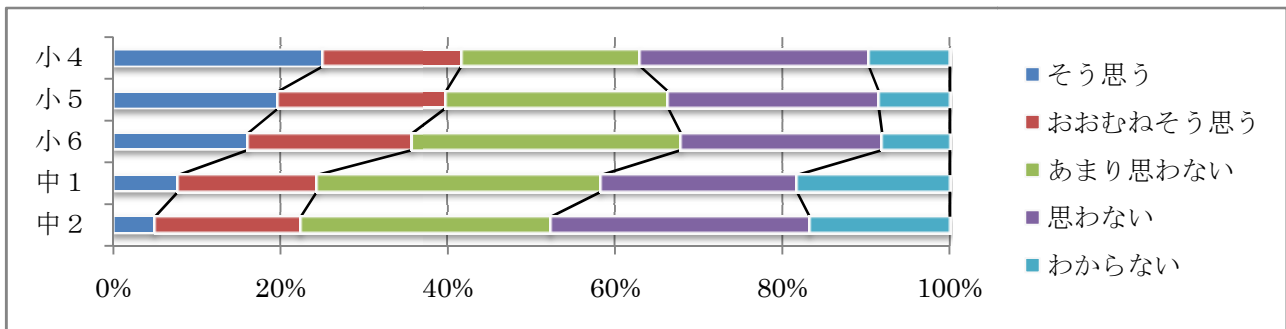
保護者は7割以上が「地域の方を先生として招いたり校区の良さを知る活動など、地域と結びついた教育活動を計画的に行ってほしい」と期待している。

一方、児童生徒の結果をみると、地域を知ったり地域の人たちと一緒に活動したりする機会は多くなっていると実感している割合は5割以下で、学年が上がるにつれて低くなり、中学生では2割程度と大幅に低くなっている。

児童生徒が地域の行事に参加したり、準備の役割を担ったりする機会は増えてきているが、児童生徒全体から見ると浸透していないことが伺える。

1-4 「児童生徒間の多様な交流活動や地域社会との交流」についての意識

児童生徒 他の学年や近くの小学校、中学校の人といっしょに活動するようになってきていると思う。〔小学校〕
他の学年や近くの小学校の人といっしょに活動するようになってきていると思う。〔中学校〕



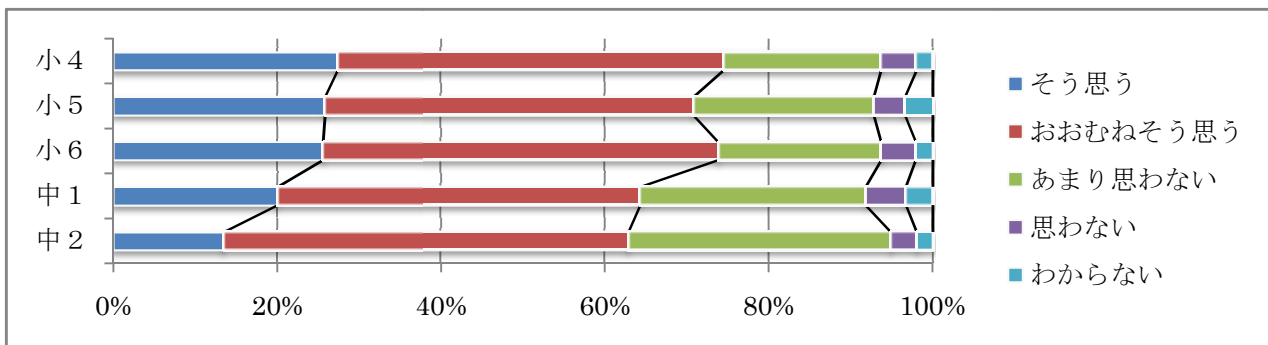
*この設問の結果は設問1-3（「地域を知ったり、地域の人たちといっしょに活動したりする学習が多くなっていると思う」）とほぼ同じような傾向になっている。

*小学生では「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している割合が4割程度と低く、中学生では2割程度とさらに低くなっている。

【児童生徒】

○どの中学校ブロックとも試行以前に比べると児童生徒の異年齢交流の機会はかなり増えてきているが、小学校と中学校との間の交流活動においては、児童会生徒会の合同会議や小学生駅伝練習の支援など一部の児童生徒のみがかかわる内容のものも多い。学級・学年、そして学校全体のかかわりなど、実状に応じた機会設定が望まれる。

保護者 異学年交流や小・中学校との交流を多くしてほしいと思う。

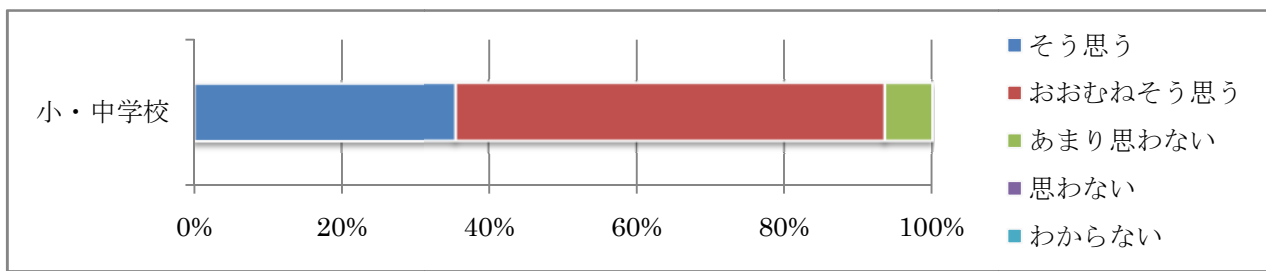


*異学年交流や小・中学校の交流を多くすることに対して、「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は小学校の保護者で7割程度であるが、中学校の保護者では6割程度となっている。

【保護者】

○小学校の保護者は異学年交流や中学校との交流によって上学年の子どもからいろいろと学んでほしいと期待していることが伺える。

学校 小中一貫教育の試行により、児童生徒間の交流活動や地域社会との交流を行うようになった。



＊ 9割以上の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○学校においても児童生徒間の交流活動や地域社会との交流の必要性を認識し、様々な取組を進めるようになってきていることが伺える。

児童生徒間の多様な交流活動や地域社会との交流に関して、学校はその必要性を認識し、様々な取組を進めるようになってきている。

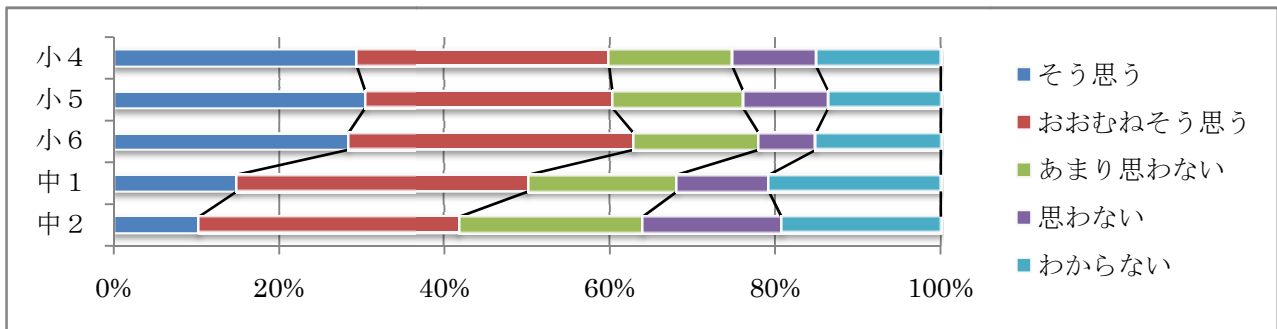
保護者の6割以上は「異学年交流や小・中学校との交流を多くしてほしい」に対して「そう思う」「おおむねそう思う」と期待する回答をしている。中でも小学校の保護者は期待する回答が7割を上回るなど、異学年交流や小・中学校との交流で他者からいろいろと学んでほしいという願いが伺える。

児童生徒は「他の学年や近くの小学校、中学校の人といっしょに活動するようになっている」の設問に対し、「そう思う」「おおむねそう思う」と回答する割合は4割以下である。児童生徒の異年齢交流や小・中学校間の交流活動は試行以前に比べ格段に多くなっているものの、全体の交流ではなく、一部の児童生徒がかかわる内容が多いことが影響しているとも考えられる。

今後、学級、学年、そして学校間でのかかわりなど実状に応じた多様な機会設定が望まれる。

1-5 「児童生徒一人一人への理解を深めること」についての意識

児童生徒 自分のことを先生がしっかりわかってくれるようになったと思う。

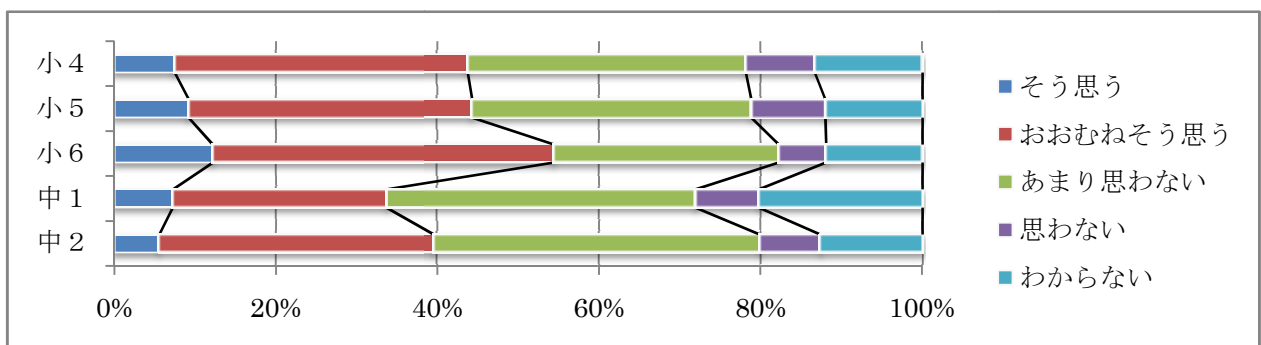


*小学生は「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合が6割程度であるが、中学生では低くなり、特に中学校2年生では4割程度まで低くなっている。

【児童生徒】

○小学校では学級担任中心のきめ細かで密な対応がなされることが多いのに対し、中学校では学級担任を基本にしながらも学年等の教員とのより広く多様なかかわりをもとに、個々の生徒の自立を促す対応に変わってきている。かかわり方の違いが、中学校での肯定的な評価が低くなることに繋がっているように思われる。

保護者 先生は、我が子のことを多方面から深く理解してくれるようになったと思う。



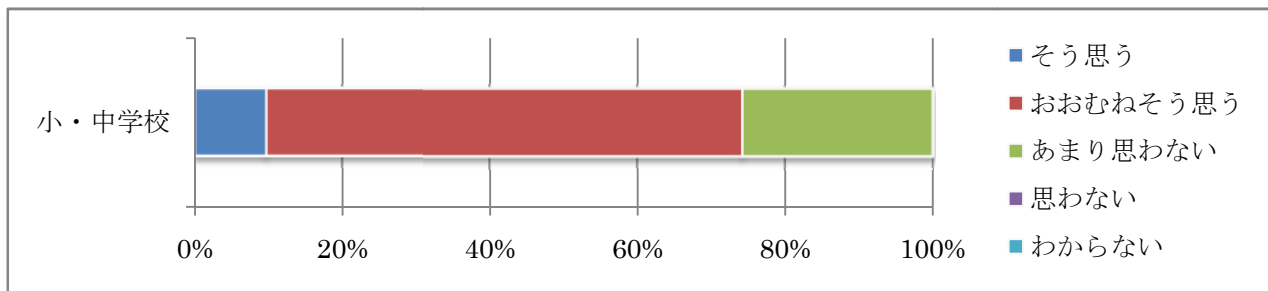
*「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した保護者の割合は4割前後と総じて低い。

【保護者】

○保護者ニーズが多様化し、保護者が感じ取れるほどの内面理解が進んでいないのではないかと。

○中学校1年の保護者は中学校入学後に入ってくる情報量が少ないと感じるのか、ギャップ（へだたり）に戸惑っていることが伺える。

学校 小中一貫教育の試行により、児童生徒への理解が深まった。



＊小・中学校の1割が「そう思う」、6割が「おおむねそう思う」、3割が「あまり思わない」と回答している。

【学校】

○学校は「児童生徒への理解が深まった」の設問に対して1割が「そう思う」、6割が「おおむねそう思う」と回答している一方で、3割の学校は「あまり思わない」と回答するなど、アンケート時点での学校の認識にばらつきが見られる。

学校は「児童生徒への理解が深まった」の設問に対して1割が「そう思う」、6割が「おおむねそう思う」としているものの、3割が「あまり思わない」と回答するなど、アンケート時点での学校の認識にばらつきがみられる。

中学生では低いものの、小学生は「自分のことを先生がしっかりわかってくれるようになったと思う」の設問で6割程度が肯定的に評価している。

一方、保護者は「先生は我が子のことを多方面から深く理解してくれるようになったと思う」という設問で、肯定的に評価したのは4割前後と、保護者が感じ取れるほどの内面理解とはなっていない様子が伺える。これには保護者ニーズの多様化も影響しているのではないかと考えられる。

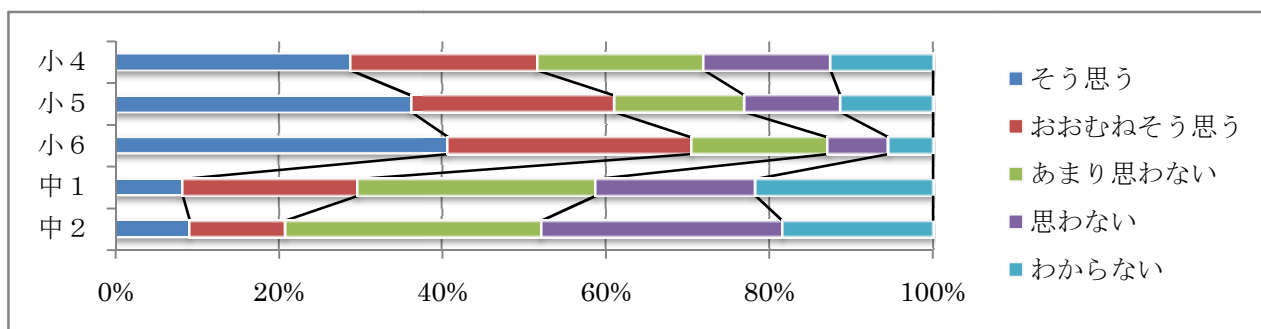
今後も、教職員が児童生徒一人一人への理解を深めることにより個に応じた指導や支援を充実していくことに加え、保護者に対しても中学校入学時も含めていろいろな機会を利用して分かりやすく丁寧な対応（説明）をしていくことが必要である。

1-6 「小学校と中学校の教職員が相互に交流を深めること」についての意識

児童生徒 小学校や中学校の先生たちが、授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う。

〔小学校〕

小学校の先生たちが、授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う。〔中学校〕



* 小学校では学年が上がるにつれて、「そう思う」「おおむねそう思う」と肯定的に回答した割合が増加し、小学校6年生で7割程度となっている。

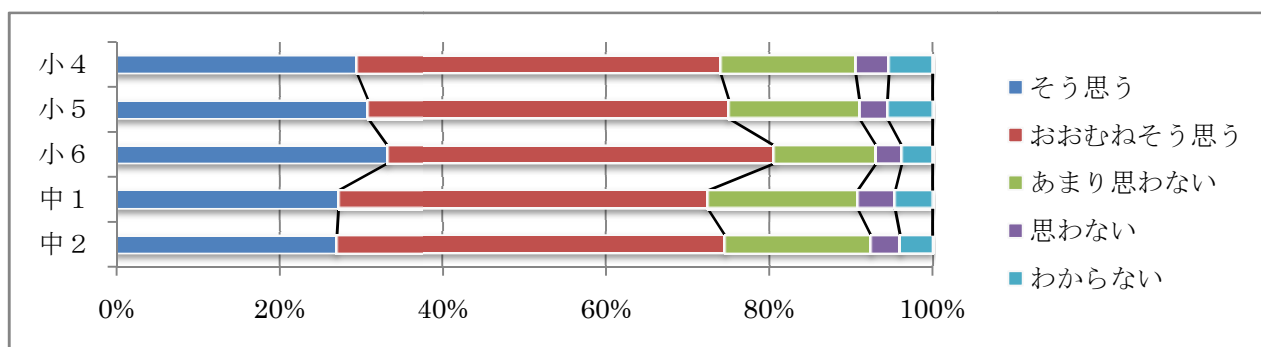
* 中学校では「そう思う」「おおむねそう思う」と回答する割合が中学校1年生で3割程度、中学校2年生で2割程度にとどまっている。

【児童生徒】

○小学生では学年が上がるにつれて「小学校や中学校の先生たちが授業をしてくれたり参観してくれたりするようになった」と肯定的に回答する割合が高くなっている。小・中学校教員による相互の授業参観等の取組や教科連携教員（小中連携加配教員）やAETによる乗り入れ指導（授業）などの効果が伺える。

○中学生では「小学校の先生たちが授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになった」と回答する割合はあまり高くないが、これは中学校では小学校の教員が乗り入れ授業（指導）を行う機会があまりないことが反映していると思われる。

保護者 小・中学校の先生がいっしょに授業参観したり、研修をしたりして交流を深めてほしいと思う。

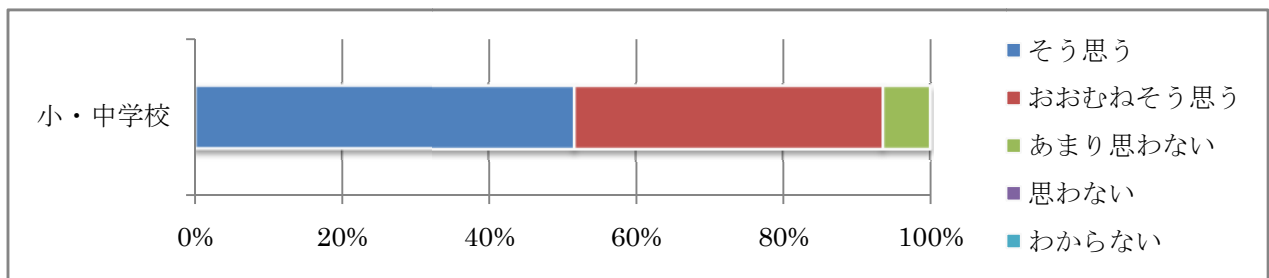


* 「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は、いずれの学年の保護者においても7割から8割程度となっている。

【保護者】

○保護者はいずれの学年においても7割以上が「小・中学校の先生がいっしょに授業参観したり、研修したりして交流を深めてほしい」と回答するなど、小・中学校教職員の相互交流による教育活動の充実に期待を寄せている。保護者は、各ブロックが取り組んでいる相互の授業参観や合同研修などを教員の研修の場としてその必要性を感じ、これらの取組が子どもたちの小学校と中学校とのなめらかな接続に活かされるのではないかと期待していることが伺える。

学校 小中一貫教育の試行により、小・中学校教職員間の交流が深まった。



* 9割以上の小・中学校が試行により小・中学校教職員間の交流が深まってきたとしている。

【学校】

○ 9割以上の学校はこれまでの取組を進める中で教職員の交流が深まったとしているが、保護者が小・中学校教職員の相互交流による教育活動の充実に期待を寄せていることに応えるためにも、学校は、今後一層の取組の充実や工夫改善が求められる。

学校は小中一貫教育の試行により小・中学校教職員の交流が深まっていると感じている。各中学校ブロックが小中合同研修会や公開授業の相互参観、教科連携教員の乗り入れ指導（授業）、小中一貫教育（チーフ）コーディネーターの日常的なコーディネート活動など小・中学校間の教職員交流を行うようになってきたためと考えられる。

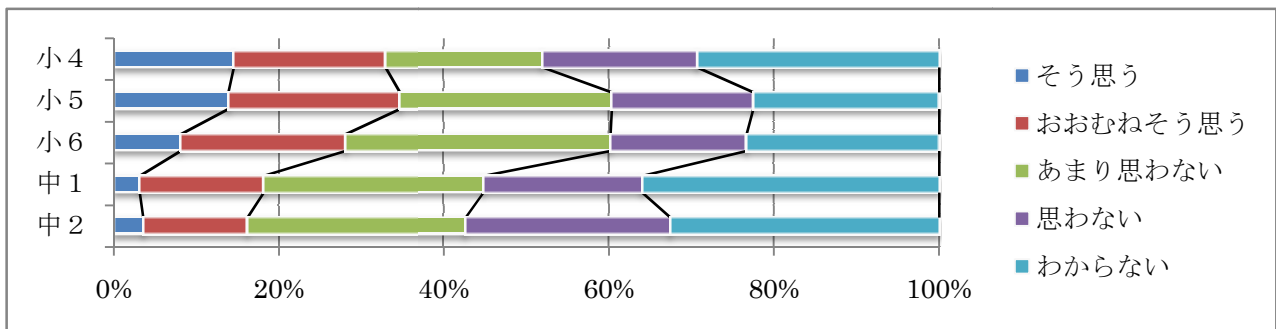
保護者においては、「小・中学校の先生がいっしょに授業参観したり、研修したりして交流を深めてほしいと思う」の設問に対し、いずれの学年でも7割以上が期待している。

一方、児童生徒に対しての設問「小学校や中学校の先生たちが授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う」の回答を見ると、小学生と中学生で意識に大きな違いが見られる。小学校では学年が上がるにつれて肯定的に回答する割合は高くなっているが、中学校では2割から3割にとどまっている。小学生の回答には、教科連携教員（小中連携加配教員）による乗り入れ授業や小・中学校教員による相互授業参観などの取組が反映していることが伺える。

今後も、小学校と中学校の教職員が相互交流による教育活動の充実や指導方法の工夫改善を行うなどして、教職員の指導力の向上を図っていくことが必要である。

1-7 「中学校ブロックを単位とした地域社会・保護者相互の連携を深めること」についての意識

児童生徒 小・中学校がいっしょになった地域での行事やPTA・育友会行事がふえたと思う。



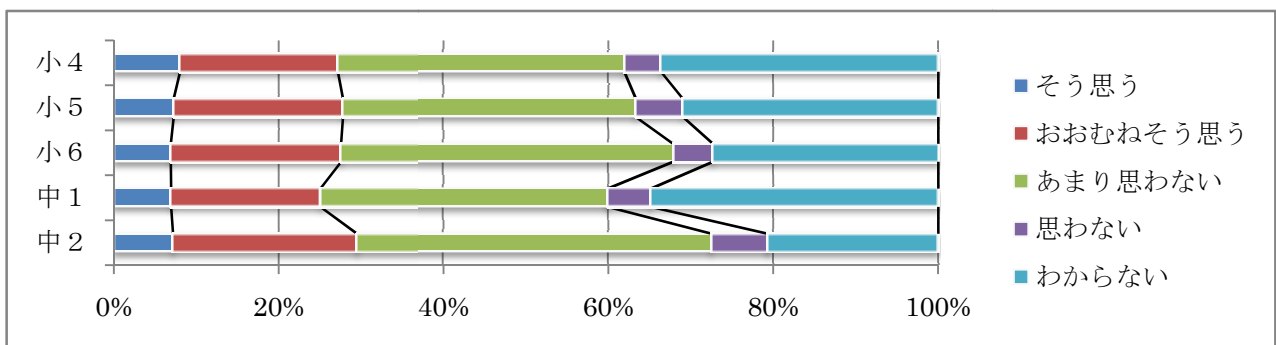
* 「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は2割から3割程度と低くなっている。

* いずれの学年においても2割から3割程度が「わからない」と回答している。

【児童生徒】

- 「小・中学校がいっしょになった地域での行事やPTA・育友会行事がふえた」という設問に対して「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は低くなっている。
- 一部の小・中学生と地域社会がつながる取組は増えつつあるが、多くの小・中学生と地域社会とがつながる取組はまだ少ない状況にあると思われる。

保護者 中学校ブロックでの地域の集まりやPTA・育友会活動が増えたと思う。

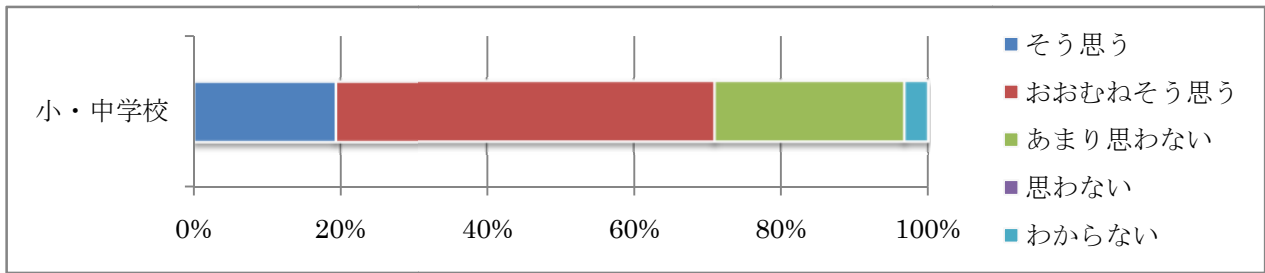


* どの学年の保護者においても「地域の集まりやPTA・育友会活動が増えた」ことにに対し「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合が3割程度にとどまっている。

【保護者】

- 保護者においても「中学校ブロックでの地域の集まりやPTA・育友会活動が増えたと思う」という設問に対して「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は低くなっている。現状では中学校ブロックを一つのまとまりとして地域行事が行われることはあまり多くなく、小学校区を単位として地域行事が取り組まれていることが多いことが実状であるため、低くなっていると考えられる。

【学校】 小中一貫教育の試行により、中学校ブロックを単位とした地域社会・保護者相互の連携が深まった。



＊小・中学校の7割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している一方、2割程度が「あまり思わない」と回答している。

【学校】

○これまで小学校区を単位とした地域社会、保護者連携の取組が主になされてきたことが、2割程度の「あまり思わない」という回答に表れていると考えられる。

「小・中学校がいっしょになった地域での行事やP T A・育友会行事がふえたと思う」の設問に対し、「ふえた」と思っている児童生徒は2割から3割程度にとどまっている。

保護者も「中学校ブロックでの地域の集まりやP T A・育友会活動が増えたと思う」と回答した割合は3割程度と高くない。

学校は7割程度が「小中一貫教育の試行により、中学校ブロックを単位とした地域社会・保護者相互の連携が深まった」としているが、本市の小中一貫教育のねらいとしてあげている7項目に対しての設問の中では肯定的な回答の割合は一番低くなっている。

一部の小・中学生と地域社会を繋げる取組は増えつつあるものの、多くの小・中学生と繋げる取組はまだまだ少ない状況にあることが反映していると考えられる。

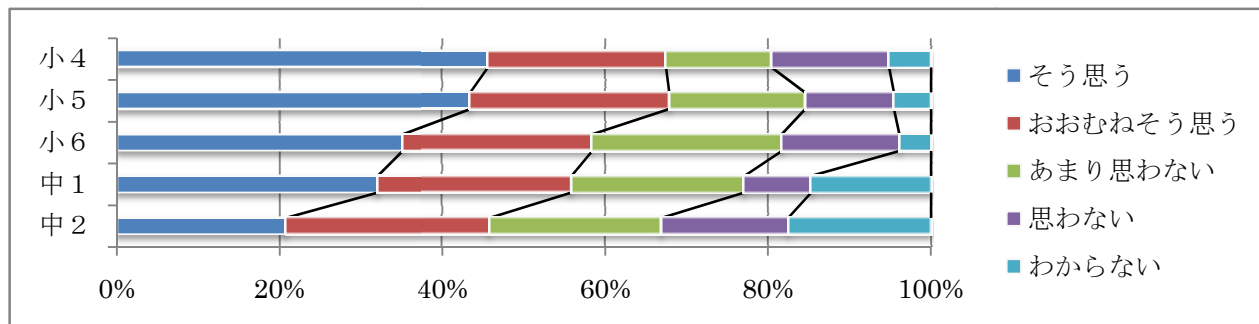
今後も、小学校や中学校ごとの地域連携に加え、中学校ブロックを単位としたP T A・育友会活動や地域諸団体と連携などにより、学校・家庭・地域社会が一体となった教育環境づくりを進めていくことが必要である。

2 小・中学校間のなめらかな接続を進めるための取組などについて

2-1 校種間の乗り入れ授業（指導）について

児童生徒 担任以外の先生や中学校の先生にも教えてほしいと思う。〔小学校〕

小学校でも、担任以外の先生や中学校の先生にも教えてもらった方がよいと思う。〔中学校〕

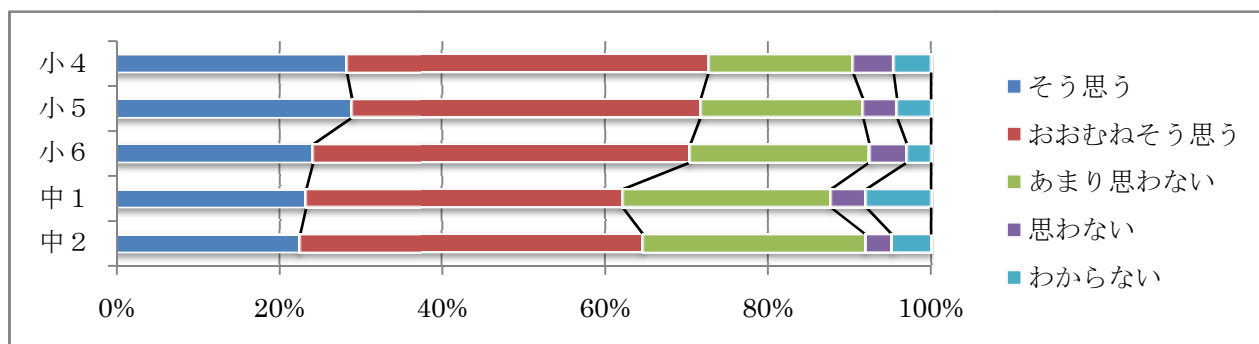


*小学校4年生・5年生では7割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答しているが、学年が上がるにつれてその割合は低くなっている。

【児童生徒】

○児童は担任以外の先生や中学校の先生にも教えてもらうことを期待していることが伺える。一方、学年が上がるにつれて「わからない」と回答している割合が増加し、あまり経験がないことに対する判断ができない状態になっている。

保護者 小学校でも、担任以外の先生や中学校の先生にも我が子を指導してほしいと思う。

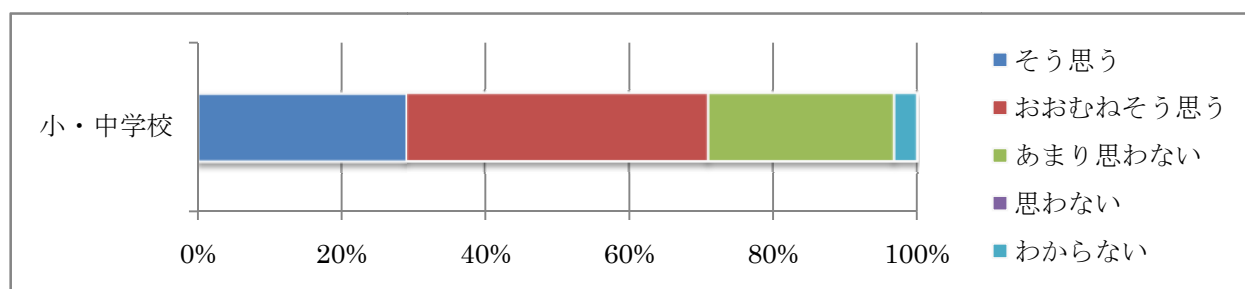


*保護者は「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は6割から7割程度になっている。

【保護者】

○保護者は、小学校においても担任以外の先生や中学校の先生にも指導してほしいと願っていることが伺える。

学校 中学校ブロックでの体制や条件が整えば、他校で授業や部活動などの指導をしてもよい。



○7割程度の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○学校は、他校で授業や部活動などの指導をするために、体制や条件が整備されることを望んでいることが伺える。

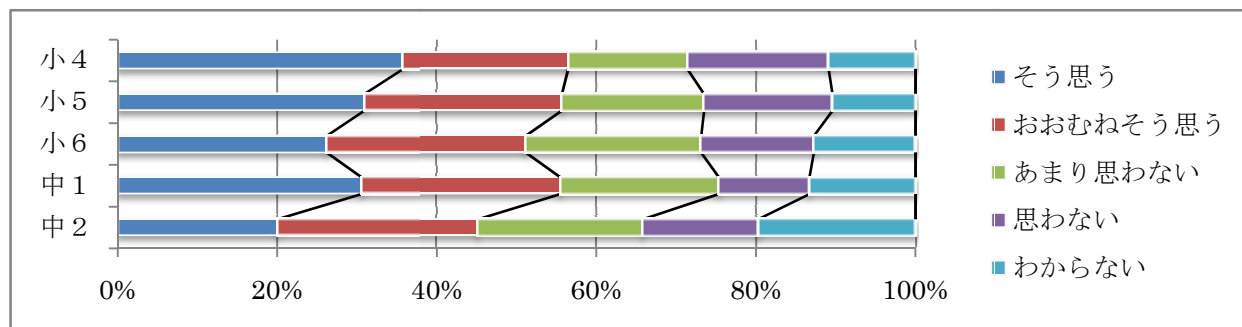
小学生は「担任以外の先生や中学校の先生にも教えてほしいと思う」の設問に、6割から7割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と肯定的に回答しているが、「小学校でも担任以外の先生や中学校の先生にも教えてもらった方がよい」の設問に対して中学校2年生では「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合が5割以下まで低くなっている。

保護者は、小学校でも担任以外の先生や中学校の先生が指導することに対して、本市が進める小学校高学年での一部教科担当制などの取組へ期待する割合が大きい。

7割程度の学校が中学校ブロックでの体制や条件が整えば他校で授業や部活動などの指導をしてもよいとしており、施設分離型の小中一貫教育校においての条件整備が課題となっている。

2-2 不安や戸惑いについて

児童生徒 小・中学校がいっしょになって行事などをすることに心配はない。

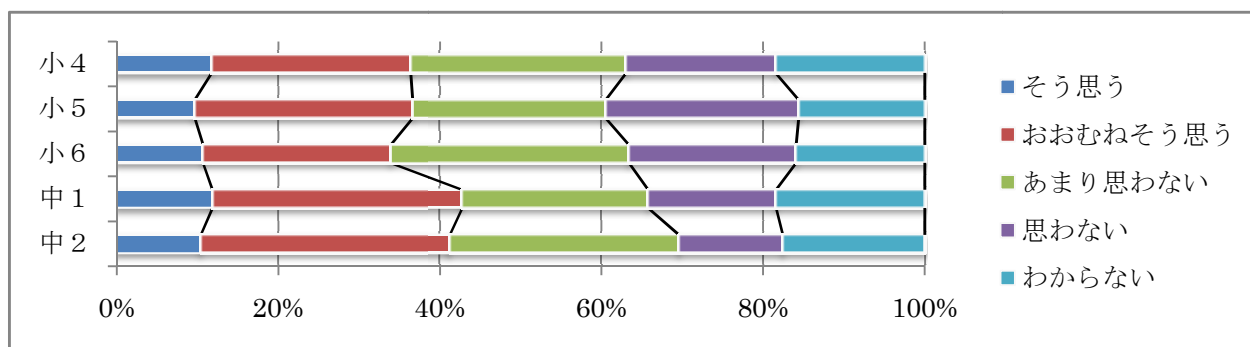


* 「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は5割程度となっている。

【児童生徒】

○試行期間に経験した交流の取組を背景にして、児童生徒の不安が払拭されていると考えられる。

保護者 小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはない。



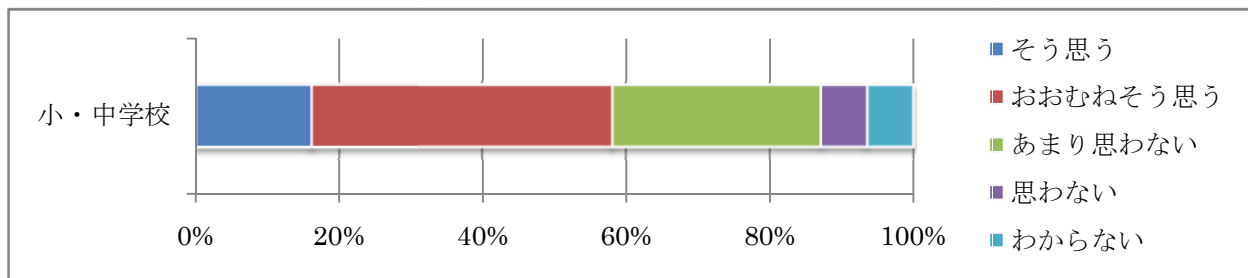
* 「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した保護者の割合は4割程度にとどまっている。

【保護者】

○「不安や戸惑いはあまり感じない・感じない」と回答した割合と「不安や戸惑いを少し感じる・感じる」と回答した割合がほぼ同程度であり、保護者の意見が分かれている。

○中学校の保護者は小学校の保護者に比べて「不安や戸惑いはない」との設問に「そう思う」「おおむねそう思う」と回答する割合が高くなっていることや、学年が上がるにつれて「思わない」と回答した割合が徐々に低くなってきていることから、不安や戸惑いが小さくなりつつあることが伺える。

学校 小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはない。



＊小・中学校の6割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答しているものの、3割程度は「あまり思わない」「思わない」と回答している。

【学校】

○学校は、6割程度が「小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはない」の設問に対し「そう思う」「おおむねそう思う」と回答しているものの、一方で3割程度は「あまり思わない」「思わない」と回答するなど、アンケート実施時点においては判断にばらつきがあることが伺える。

「小・中学校がいっしょになって行事などをすることに心配はない」の設問に対し「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している児童生徒の割合は5割程度である。

保護者は、「小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはない」の設問に対し、「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合と、「あまり思わない」「思わない」と回答した割合は同程度である。

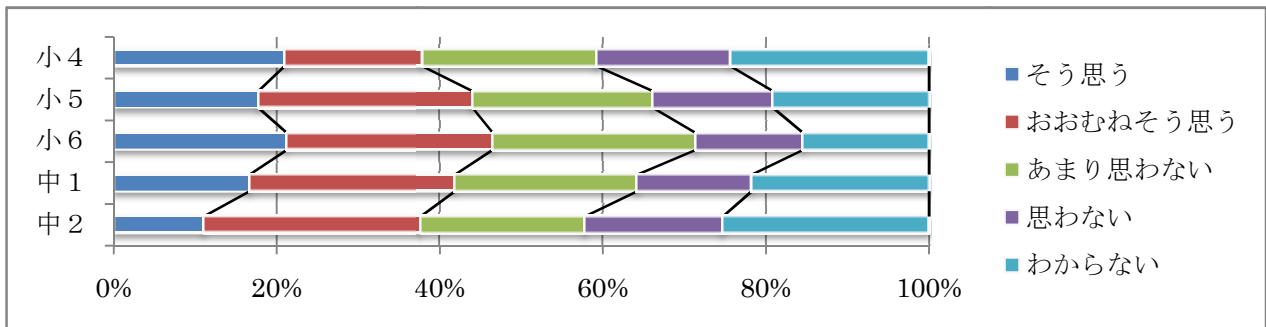
学校においては、6割程度が小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはないと回答しているものの、3割程度は不安や戸惑いがあると回答している。

小中一貫教育の試行段階においては、まだ十分な成果も現れておらず、整理しなければならない課題もあることから、このような結果になっていると考えられる。

今後も、中学校ブロックにおける小・中学校間の系統的・継続的な指導や小・小学校間の連携を日常的に進めていくとともに、取り組み内容や児童生徒が変容（成長）していく姿なども積極的に情報発信していくことが必要である。

2-3 広報活動について

児童生徒 近くの小学校や中学校のようすが、おたよりや掲示物などでわかるようになった。〔小学校〕
 近くの小学校のようすが、学校通信や掲示物などでわかるようになった。〔中学校〕

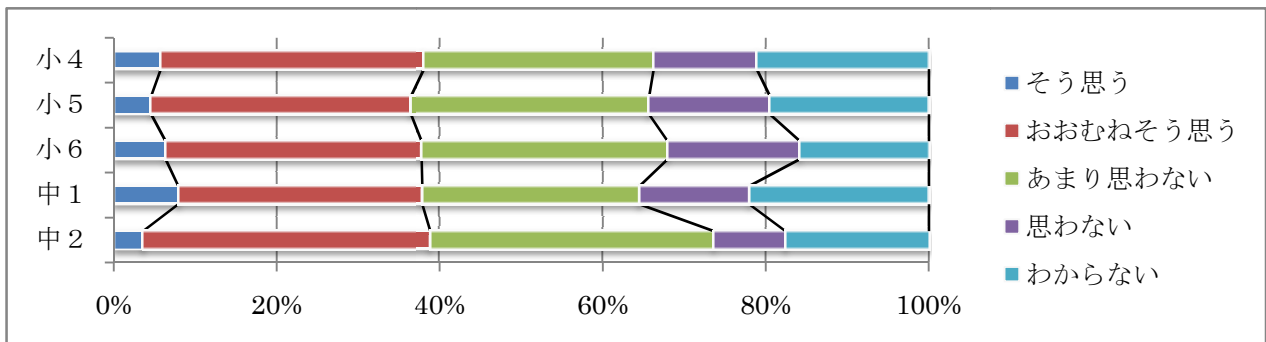


* 「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は4割程度である。

【児童生徒】

○いずれの学年も「わからない」と回答している割合が多く、児童生徒に対する発信が不十分であると思われる。

保護者 リーフレットやたより、インターネットなどで、宇治市の中小一貫教育の取組状況を知ることができる。

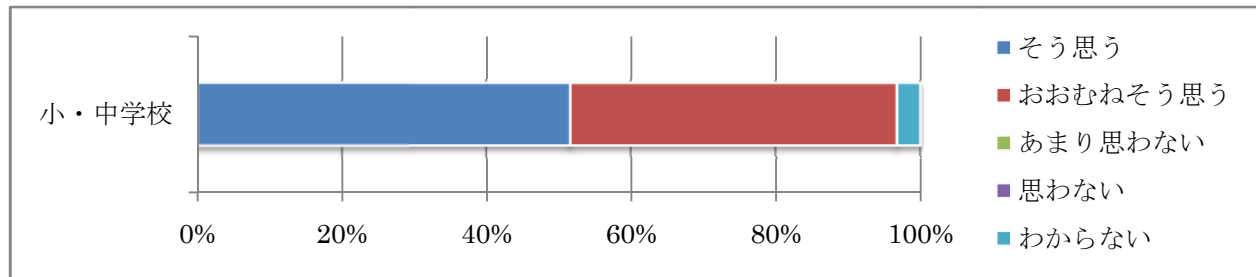


* 「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している保護者の割合は、どの学年においても4割程度にとどまっている。

【保護者】

○市教委や中学校ブロック、学校ではそれぞれリーフレットや小中一貫教育だより、学校だよりなどによって取組内容や児童生徒の活動を様子などの情報発信を行っているが、まだ十分には浸透していないことが伺える。

【学校】 市教委や中学校ブロックなどが発行するリーフレット（小中一貫教育だより）などは、小中一貫教育の取組全般について保護者や地域住民に広報することに役立っている。



＊ 9割以上の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○学校は、市教委や各中学校ブロックが発行している小中一貫教育だよりやリーフレットなどが保護者や地域住民への広報手段の一つとして有効であると認識していることが伺える。

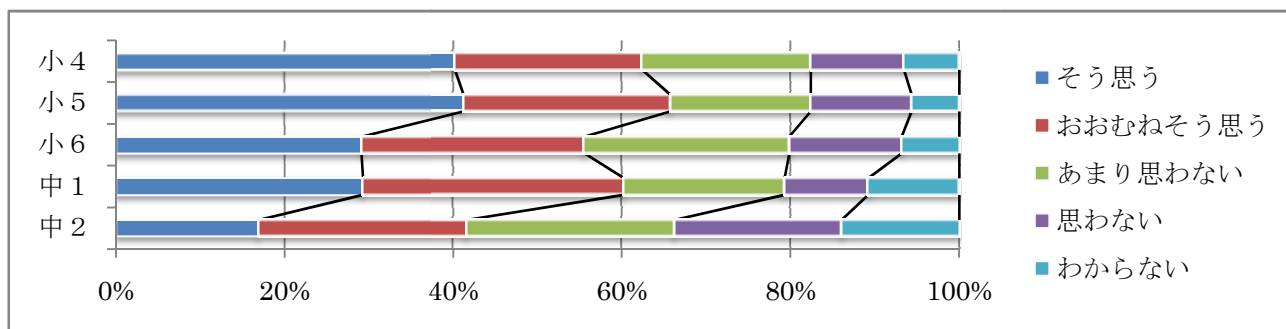
学校は、市教委や中学校ブロックで発行している小中一貫教育だよりやリーフレット、そして毎月の学校だよりなどは保護者や地域住民への広報手段の一つとして役立っていると回答している。

しかし、受け手の保護者や児童生徒は「リーフレットやたより、インターネットなどで、宇治市の小中一貫教育の取組状況を知ることができる」の設問に対し「わからない」と回答している割合が2割程度あり、情報発信に不十分さを残している状況が伺える。

今後も、広報紙などに加え、地域に出かけて直接説明するなどいろいろな方法で積極的な情報発信が必要である。

2-4 小・中学生の交流活動や合同行事について

児童生徒 小学生と中学生がいっしょに活動することは大切だと思う。

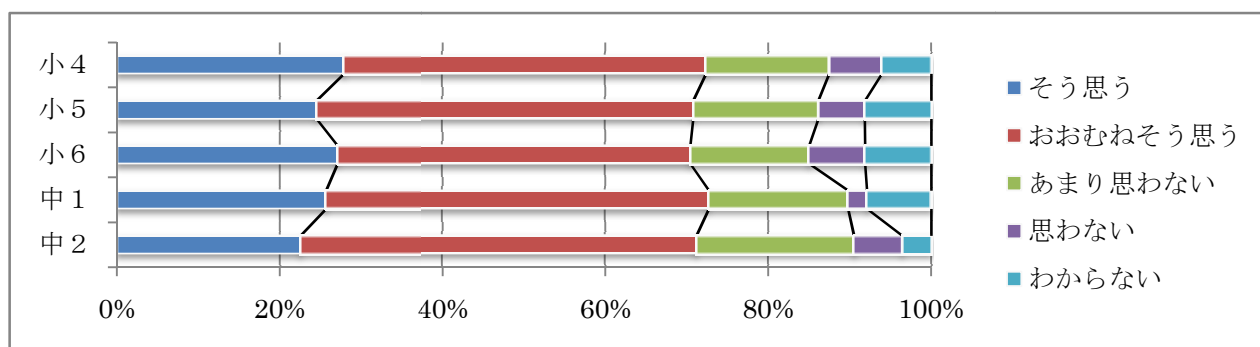


*「そう思う」「おおむねそう思う」と肯定的に回答した割合は、小学校4年生から中学校1年生では6割程度であるが、中学校2年生では4割程度にとどまっている。

【児童生徒】

- この設問に対する回答は設問2-2「小・中学校がいっしょになって行事をすることに心配はない」における回答と似たような傾向を示している。
- 試行期間に経験した交流の取組を背景にして、児童生徒の不安が払拭されていることが反映していると考えられる。

保護者 我が子の成長にとって、小学生と中学生の交流活動や合同行事などを行うことはよいことだと思う。

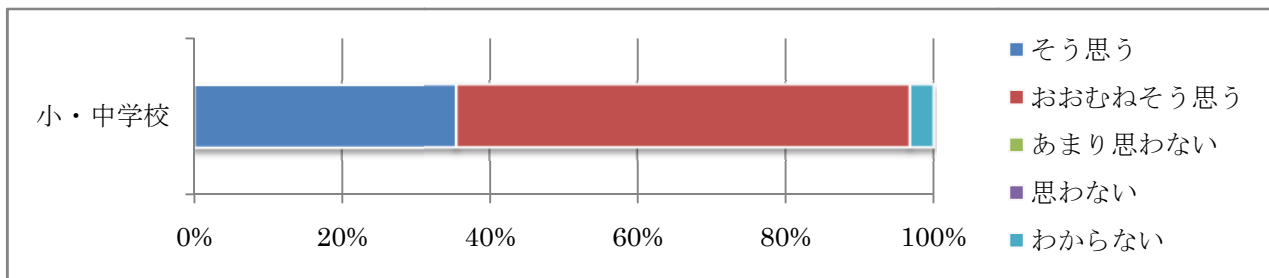


*「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は、どの学年においても7割程度である。

【保護者】

- どの学年の保護者とも7割以上が「我が子の成長にとっては、小学生と中学生の交流活動や合同行事を行うことはよいことだと思う」に対して「そう思う」「おおむねそう思う」と回答するなど、小学生と中学生の交流活動や合同行事などの取組への期待が大きいことが伺える。

学校 小・中学生の交流活動や合同行事は教育的に有効である。



* 9割以上の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○学校は「小・中学生の交流活動や合同行事は教育的に有効である」と考えていることが伺える。

学校は、小・中学校の交流活動や合同行事は教育的に有効であると回答している。

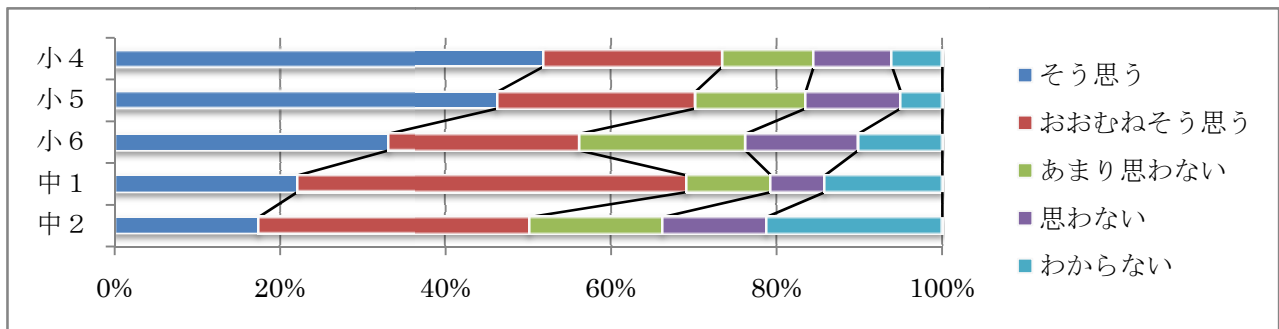
また、保護者は「我が子の成長にとって、小学生と中学生の交流活動や合同行事などを行うことはよいことだと思う」の設問に7割以上が肯定的な回答を行うなど、期待が寄せられている。

児童生徒は「小学生と中学生がいっしょに活動することは大切だと思う」の設問に肯定的に回答した割合は4割から6割程度であり、「小・中学校がいっしょになって行事することに心配はない」の設問に対する回答と似ている。小中一貫教育の試行段階での取組で経験したことが回答の割合に反映していると考えられる。

現在、中学校ブロックにおいては小・中学校の交流活動の取組を様々な形で行っている。今後も、多くの児童生徒が交流できる機会を増やすことで、豊かな人間関係を培うことが必要である。

2-5 自尊感情の育成について

児童生徒 上級生や中学生を、すごいと感じるようになった。〔小学生〕
小学生に対して、中学生としての自信と自覚がでてきた。〔中学校〕

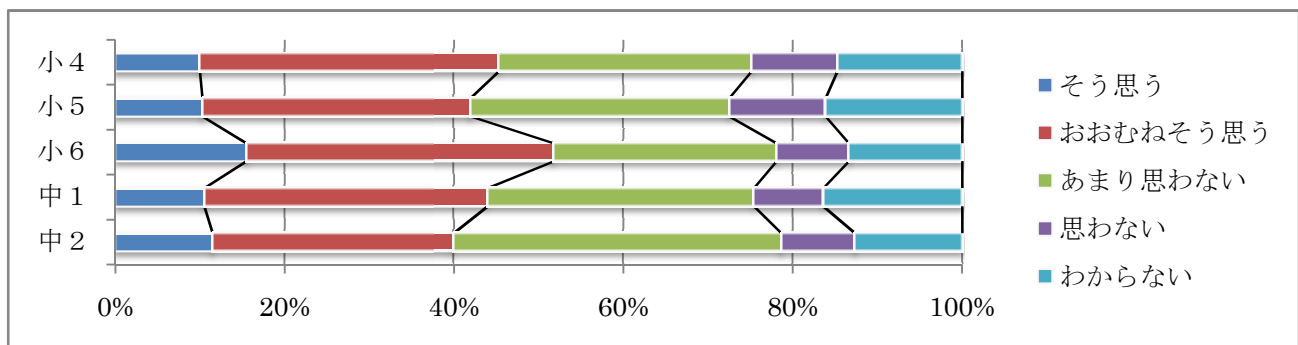


- * 異学年交流や合同行事などが行われる中で、上級生や中学生をすごいと感じたり、下級生に対して上級生としての自信と自覚が生まれたりするようになったと肯定的に回答した割合は、6割から7割程度である。
- * 「わからない」とした割合は、学年が上がるにつれて高くなる傾向が見られる。

【児童生徒】

- どの学年の児童生徒においても6割前後が、異学年の児童生徒とかかわる中で意識の変化を感じ取っていることが伺える。
- 小学校4年生、5年生は7割以上の児童が「上級生や中学生をすごいと感じるようになった」と回答している。これは、上級生や中学生と異学年交流などの場で一緒に活動したり、上級生や中学生などが活動する様子を見たりしていることが反映していると考えられる。

保護者 我が子は交流活動などを通して、上級生をよき兄、姉と感じたり、よき兄、姉になろうとしたりするようになったと思う。

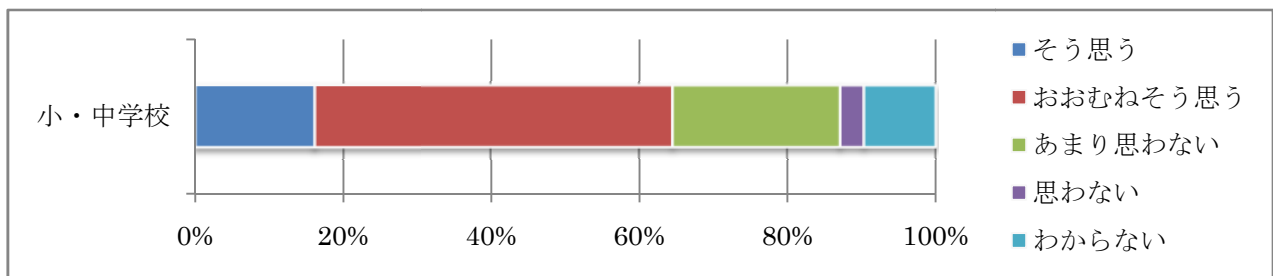


- * 「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は4割程度となっている。

【保護者】

- 設問2-4「我が子の成長にとっては、小学生と中学生の交流活動や合同行事などを行うことはよいことだと思う」に対して「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合が7割程度であるなど期待は大きいですが、この設問に対しては、まだ子どもの変容がよく見えてこないことから「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合が4割から5割にとどまっている。

学校 小中一貫教育により、自尊感情が育つと考える。



＊小・中学校は6割程度が「そう思う」「おおむね思う」と回答し、3割程度は「あまり思わない」「思わない」と回答している。

【学校】

○学校は「小中一貫教育により、自尊感情が育つと考える」の設問に対し6割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答しているものの、一方で3割程度が「あまり思わない」「思わない」、1割が「わからない」と回答しているなど、アンケート実施時点では判断にばらつきがあることが伺える。

小・中学生の6割から7割が「上級生や中学生をすごいと感じるようになった」「小学生に対して中学生としての自信と自覚がでてきた」の設問に肯定的に回答している。異学年の児童生徒とかかわる中で、自分自身の意識の変化を感じとっていることが伺える。

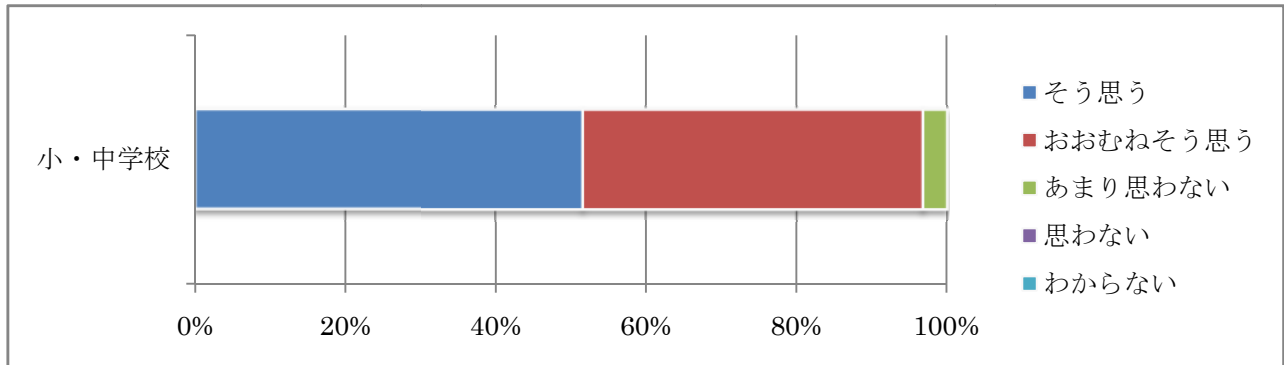
しかし、保護者は「我が子は交流活動などを通して上級生をよき兄、姉と感じたり、よき兄、姉になろうとしたりするようになったと思う」の設問に「そう思う」「おおむねそう思う」と肯定的に回答している割合は4割から5割程度にとどまっている。子どもたちの変容についてはまだ実感できていない状況にあることが伺える。

学校においては、6割程度が小中一貫教育により自尊感情が育つと考えると回答しているが、3割程度は小中一貫教育だけでは自尊感情が育つとは考えていない状況がある。

今後も、各ブロック、各学校において異学年交流などの実施内容及び実施方法などの工夫改善を図るとともに、それらの取組状況や児童生徒の感想などを保護者に伝えるなど情報発信面での工夫をすることも必要であると考ええる。

3 小中一貫教育を進める中学校ブロックの体制等について

1 中学校ブロックにつくられている推進組織は、小中一貫教育の推進に役立っている。

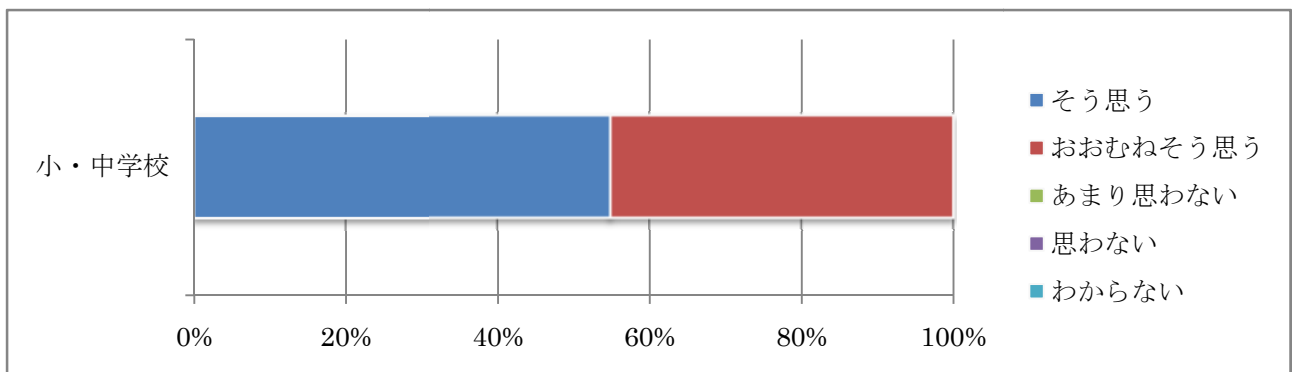


* 9割以上の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○学校は、ブロックで組織している推進委員会（ブロックにより異なる名称）は有効であると認識している。
今後も、ブロック推進組織を中心に系統的・継続的に取組を進めていくことが必要である。

2 各校の小中一貫教育コーディネーターの役割は、小中一貫教育の推進に役立っている。

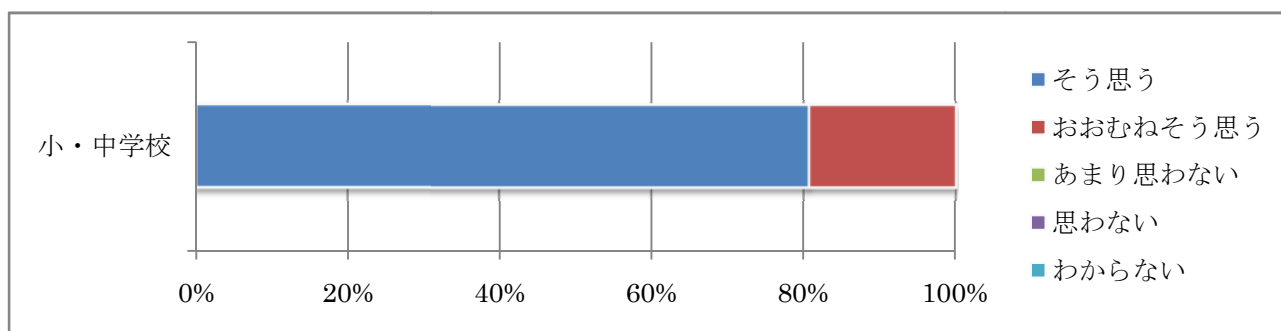


*すべての小・中学校が、「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○学校は、小中一貫教育コーディネーターの役割がブロックの小中一貫教育の取組推進に役立っているとしている。

3 中学校ブロックの教科連携教員・小中連携加配教員の役割は、小中一貫教育の推進に役立っている。

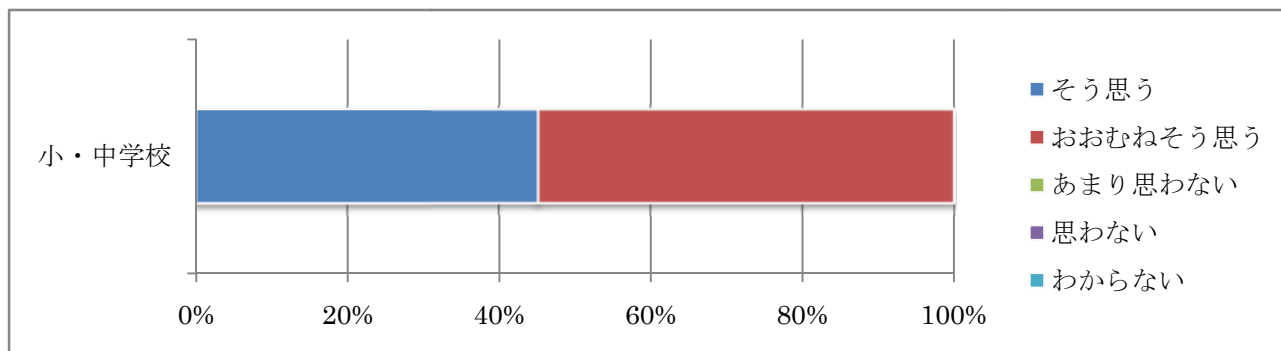


＊すべての小・中学校が、「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○学校は、教科連携教員や小中連携加配教員による小学校高学年での学習指導が小学校から中学校へのなめらかな接続を図り、小・中学校の段差「中1ギャップ」を解消することに有効な1つの方策であると判断していることが伺える。

4 中学校ブロック内の授業や指導の様子を参観することは、児童生徒理解や自校での指導に役立っている。

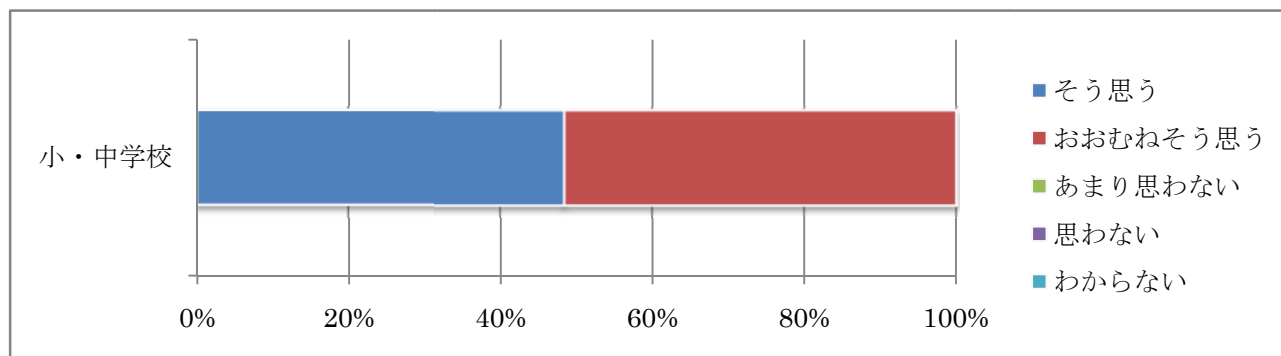


○すべての小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○小学校と中学校の学習のつながりを意識した授業づくりや授業の進め方などについて、授業参観を通して研修する取組により、それぞれの学校の指導や児童生徒理解のさらなる充実につながっているとしていることが伺える。

5 中学校ブロックで行う合同研修会は、児童生徒理解や自校での指導に役立っている。



○すべての小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答をしている。

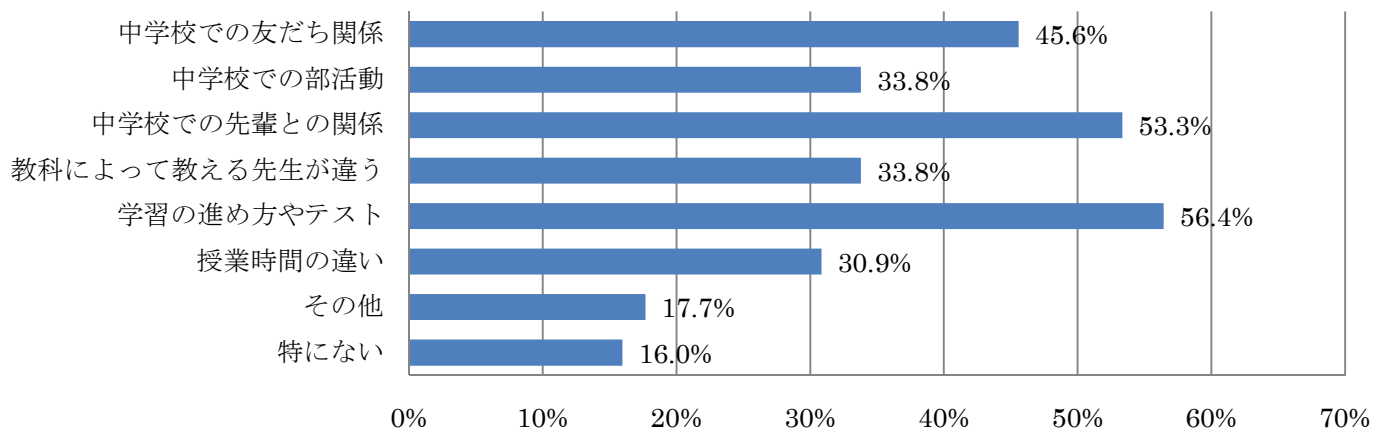
【学校】

○ブロック内の他校や校種の違う学校の取組や指導方法を交流し共通理解を図ることは、小・中学校間のなめらかな接続を図り、小・中学校教職員が義務教育9年間を見通した指導を行う上で有効であり、自校の教育活動推進に役立っているとしていることが伺える。

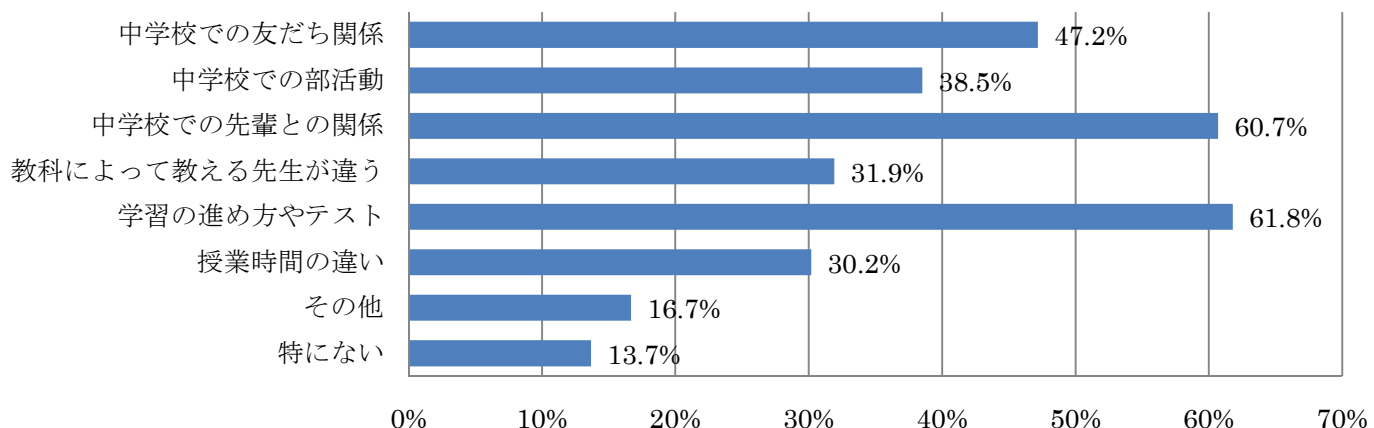
4 中学校入学に係る心配や不安、悩み、戸惑いなどについて

児童生徒 中学校入学に向け、心配や不安に思うことはありますか。(複数回答可)〔小学生〕
中学校入学直後、悩んだり、とまどったりしたことはありましたか。(複数回答可)〔中学校〕

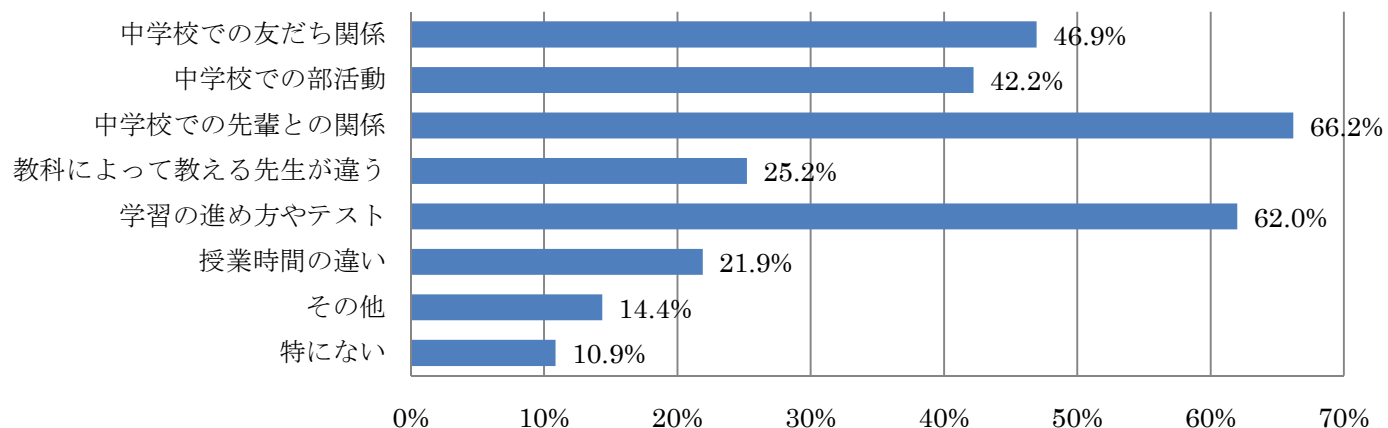
小学校4年児童



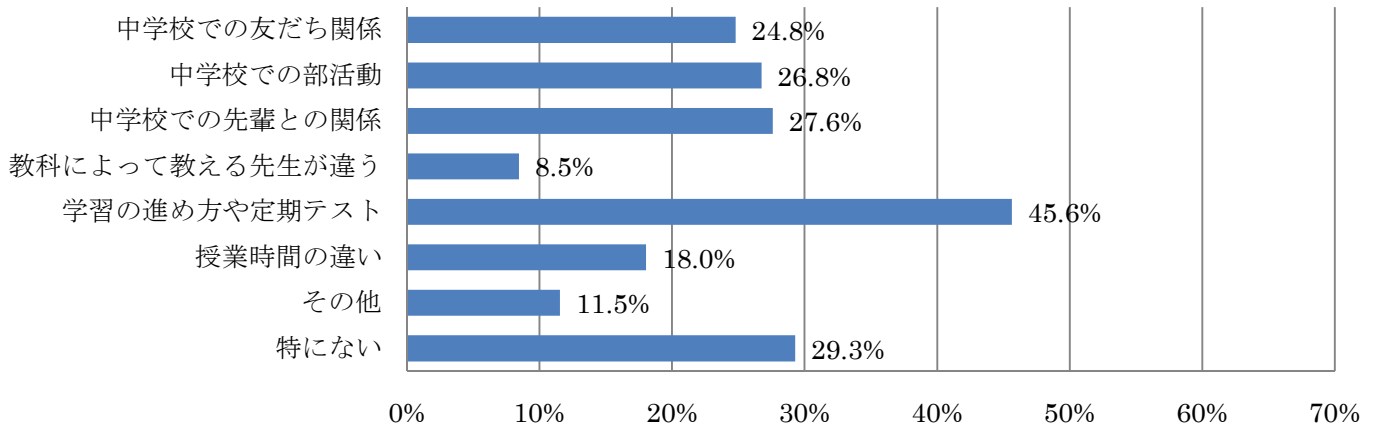
小学校5年児童



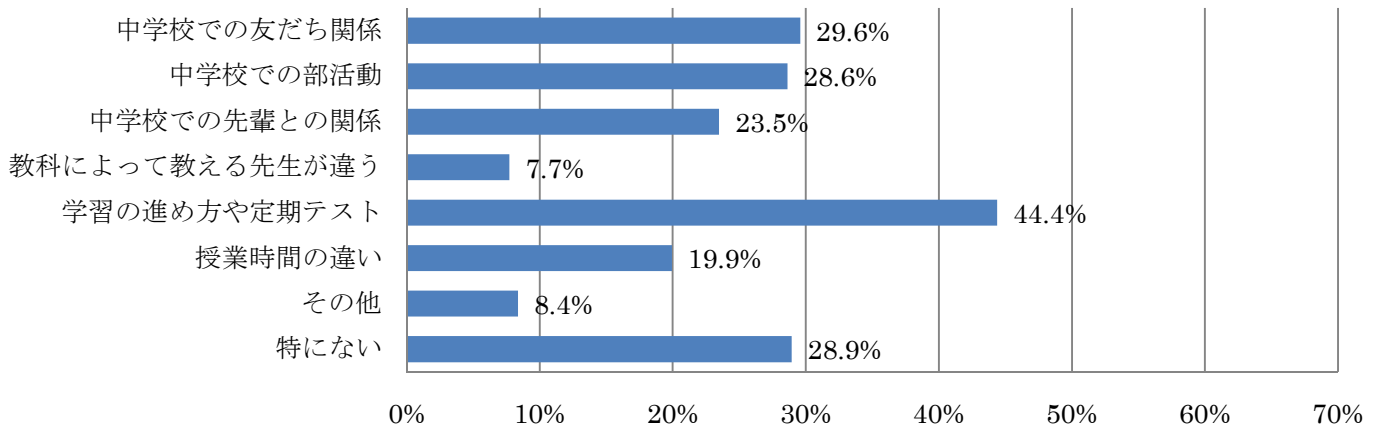
小学校6年児童



中学校 1 年生徒



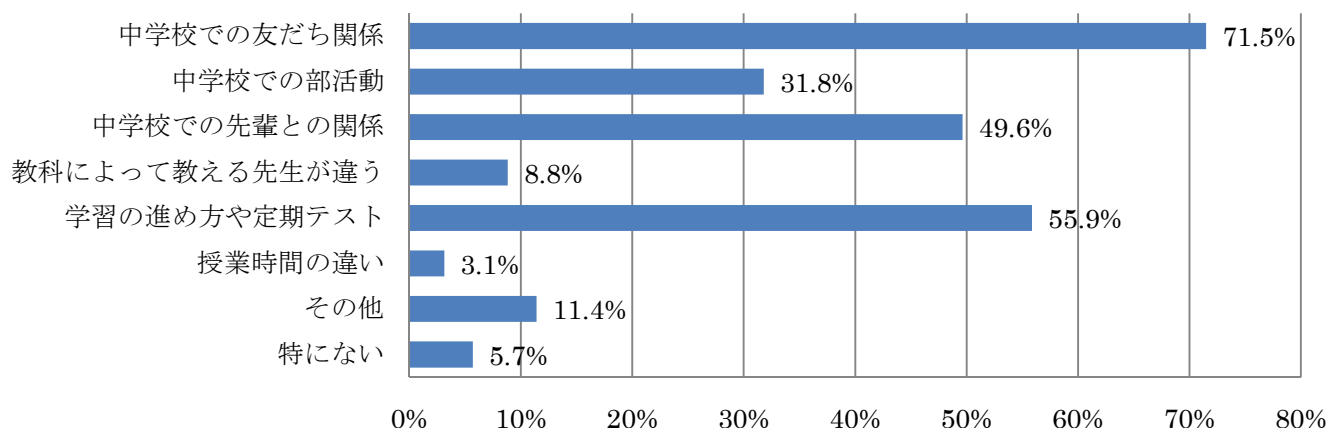
中学校 2 年生徒



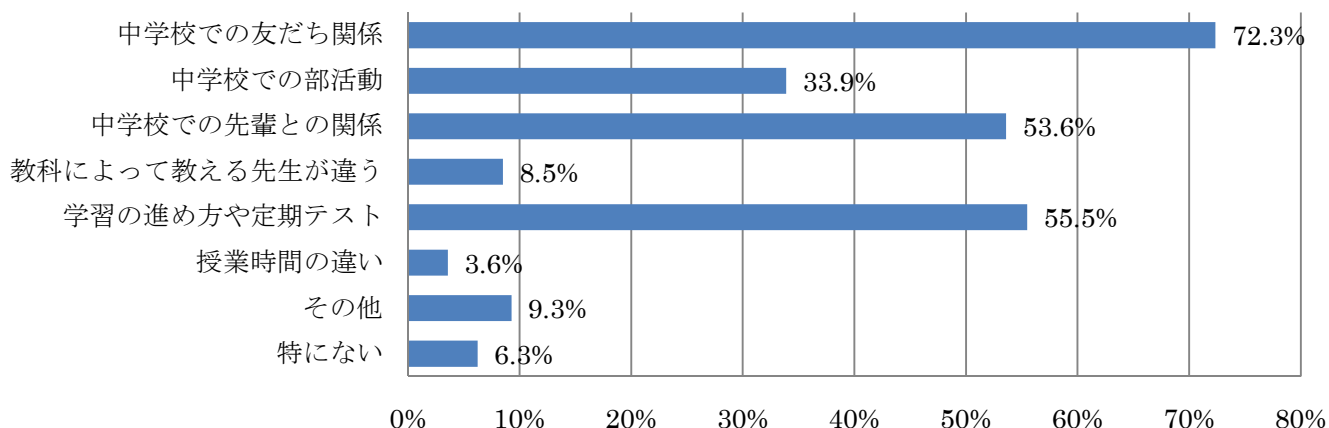
＊「中学校入学に向け、心配や不安に思うことはありますか（小学生）」「中学校入学直後、悩んだり、とまどったりしたことはありますか（中学生）」の設問に対する回答状況をみたとき、小学校から中学校の接続の時期において、心配や不安、戸惑いが大きい項目は「中学校での友だち関係」「中学校での先輩との関係」「学習の進め方や定期テスト」の3項目があげられる。

保護者 お子さんの中学校入学に向け、保護者として心配や不安に思っておられることはありますか。(複数回答可)〔小学生保護者〕
お子さんが、中学校入学直後、悩んだり、戸惑ったりしていたと感じたことはありましたか。(複数回答可)〔中学生保護者〕

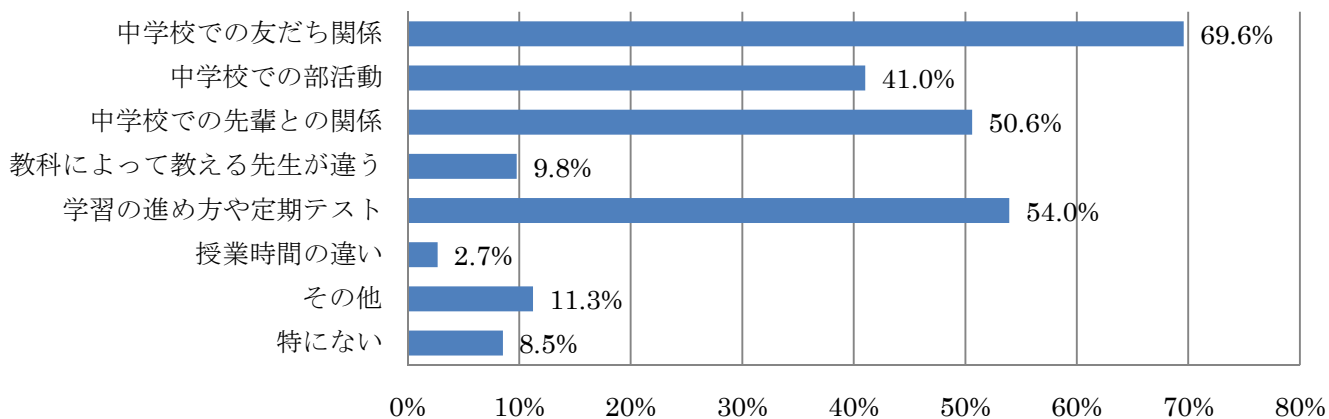
小学校4年保護者



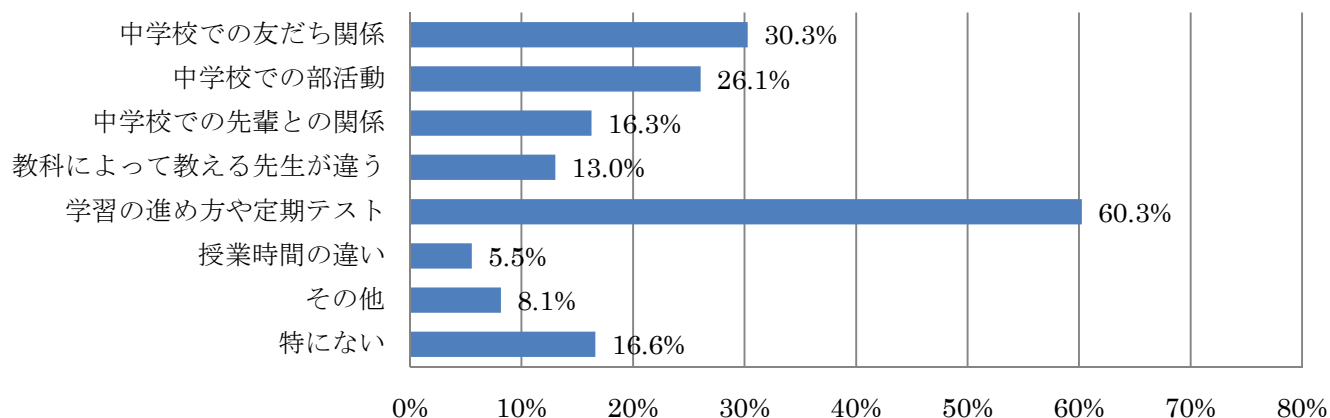
小学校5年保護者



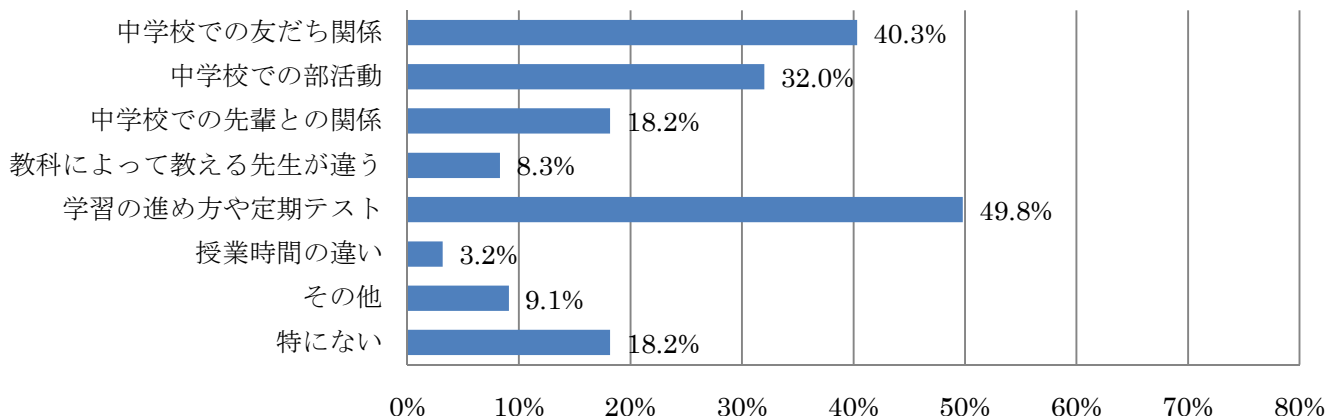
小学校6年保護者



中学校 1 年保護者

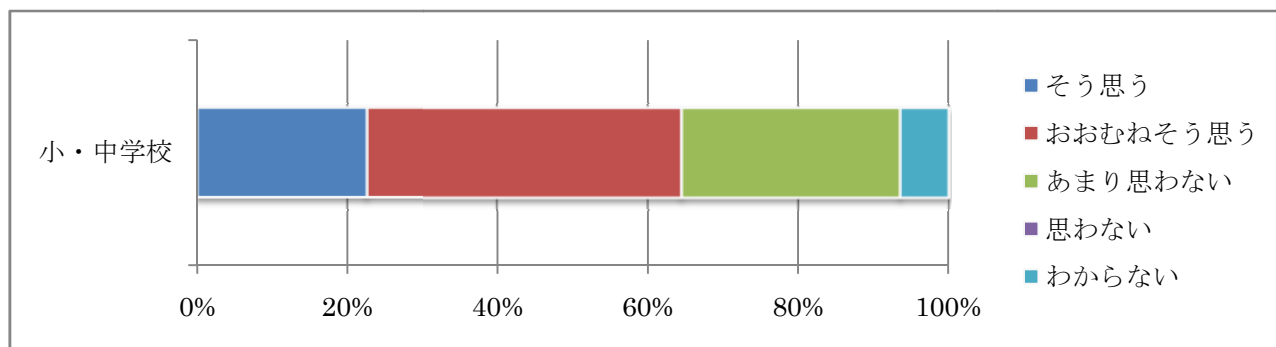


中学校 2 年保護者



＊「中学校入学に向け、保護者として心配や不安に思っておられることはありますか（小学生保護者）」「中学校入学直後、悩んだり、戸惑ったりしていたと感じたことはありましたか（中学生保護者）」の設問に関する回答をみたとき、小学校から中学校の接続の時期において心配や不安、戸惑いがある項目は「中学校での友だち関係」「中学校での先輩との関係」「学習の進め方や定期テスト」の3項目があげられる。

学校 いわゆる中1ギャップを感じることもある。



＊6割程度の小・中学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

学校の3割程度が、いわゆる中1ギャップをあまり感じないとしている。

「中学校入学に向け、心配や不安に思うことはありますか（小学校）」「中学校入学直後、悩んだり、とまどったりしたことはありますか（中学校）」の設問に関する児童生徒の回答状況をみたとき、小学校から中学校で回答する割合が低くなっている項目は「中学校での友だち関係」「中学校での先輩との関係」「教科によって教える先生が違う」などがある。「教科によって教える先生が違う」の項目では、小学校4年生～小学校6年生での変化を見ていくと学年が上がるにつれて漸次低くなっている。小学校高学年で一部教科担当制を行い中学校の教科担任制に繋げていることや、すべての中学校が行う小学校6年生半日入学での授業や部活動の体験活動が有効に反映しているのではないかと考えられる。

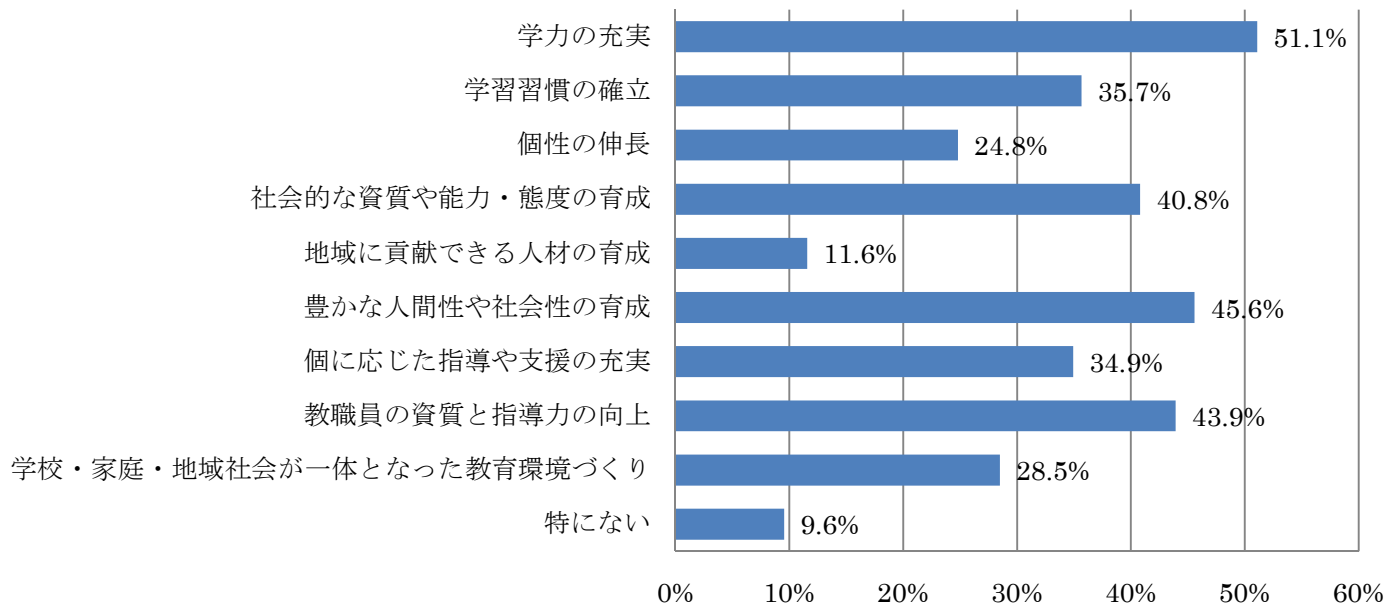
保護者の回答からは、「中学校での友だち関係」「中学校での先輩との関係」などは中学校入学後子どもたちの不安が解消されてきていると感じているが、「学習の進め方や定期テスト」に対する不安はそのまま継続していると感じていることが伺える。

今後も、義務教育9年間を見通すことのできる年間指導計画（宇治スタンダード）に基づく系統的・継続的な指導の充実を図るとともに、ブロック内の小学校・小学校間や小学校・中学校間での乗り入れ授業（指導）や交流活動などを進めながら、小学校から中学校へのなめらかな接続に配慮した取組を継続的に進めていくことが必要である。

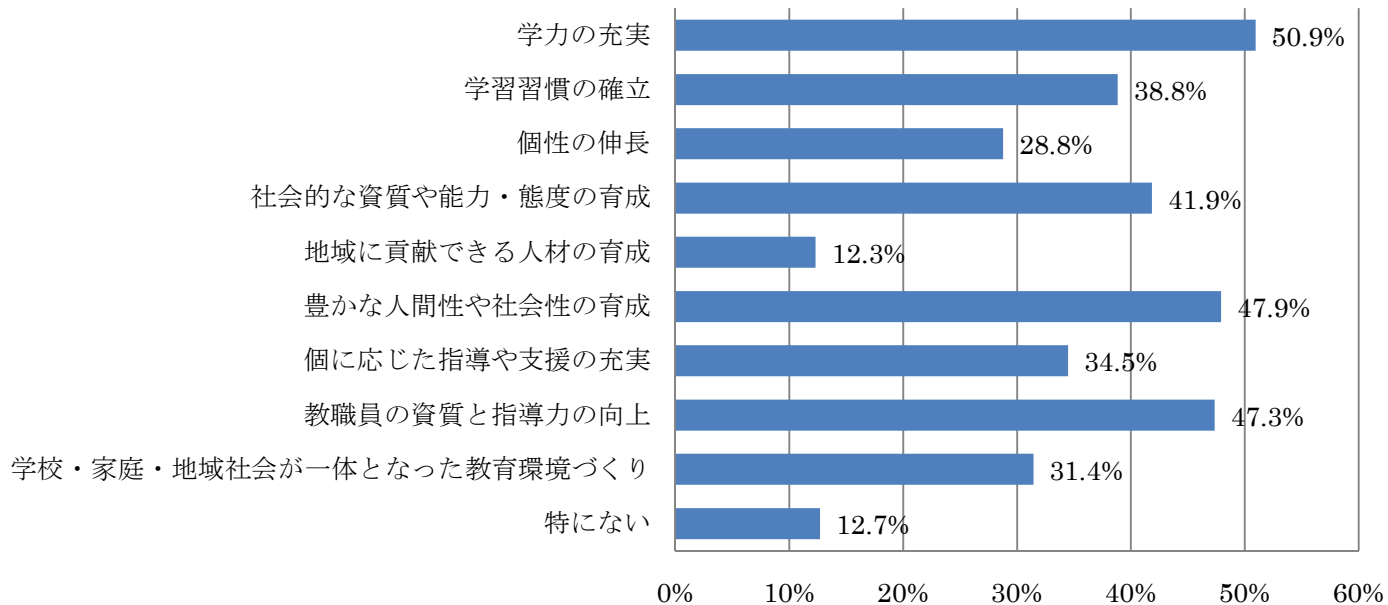
5 小中一貫教育の取組を進めることにより期待する成果について

保護者 小中一貫教育の取組を進めることにより、子どもたちや学校などにどのような成果が現れることを期待されますか。(複数回答可)

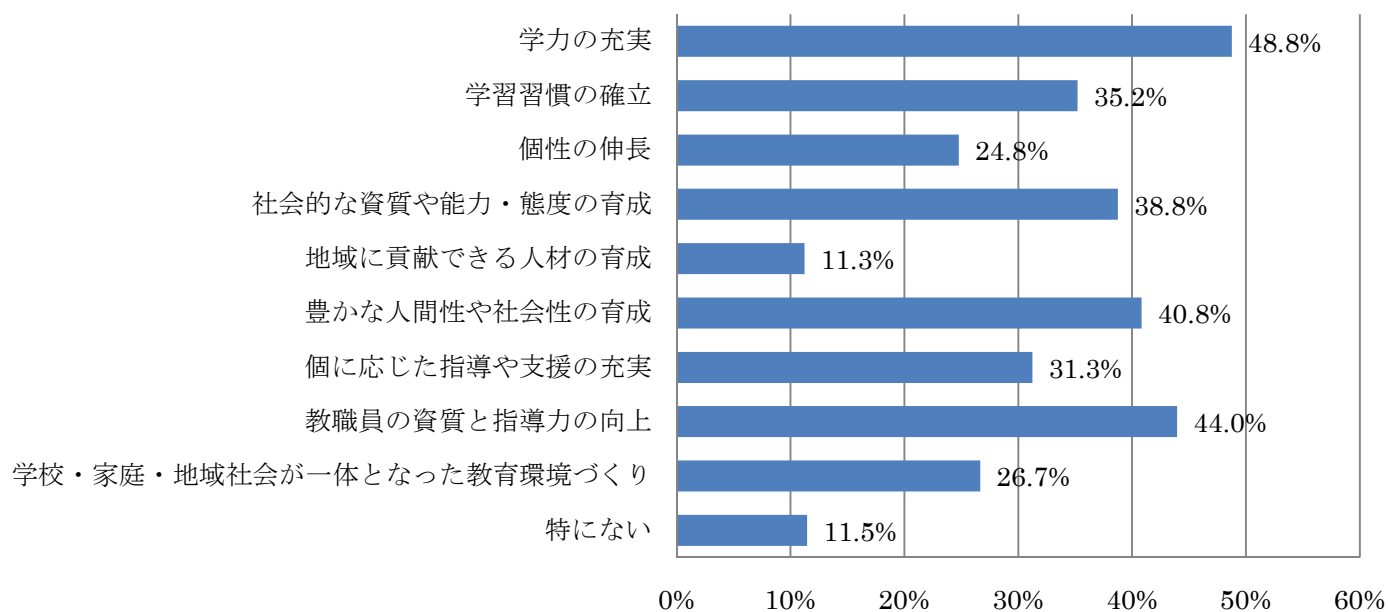
小学校4年保護者



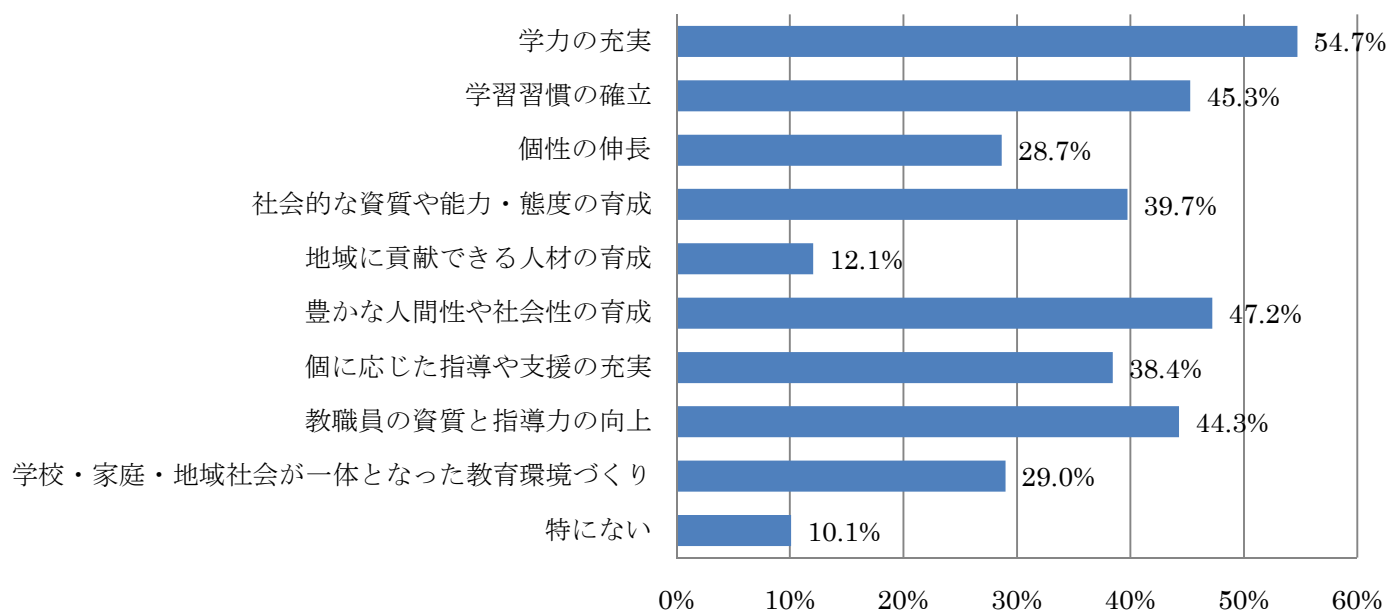
小学校5年保護者



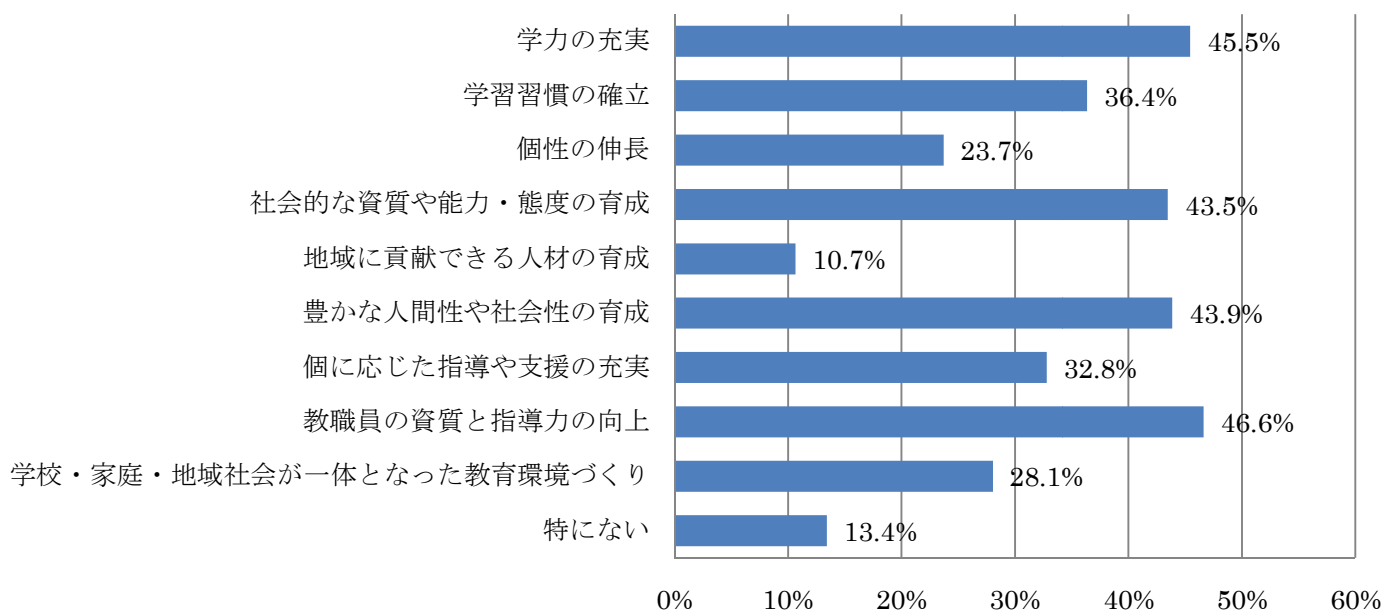
小学校 6 年保護者



中学校 1 年保護者

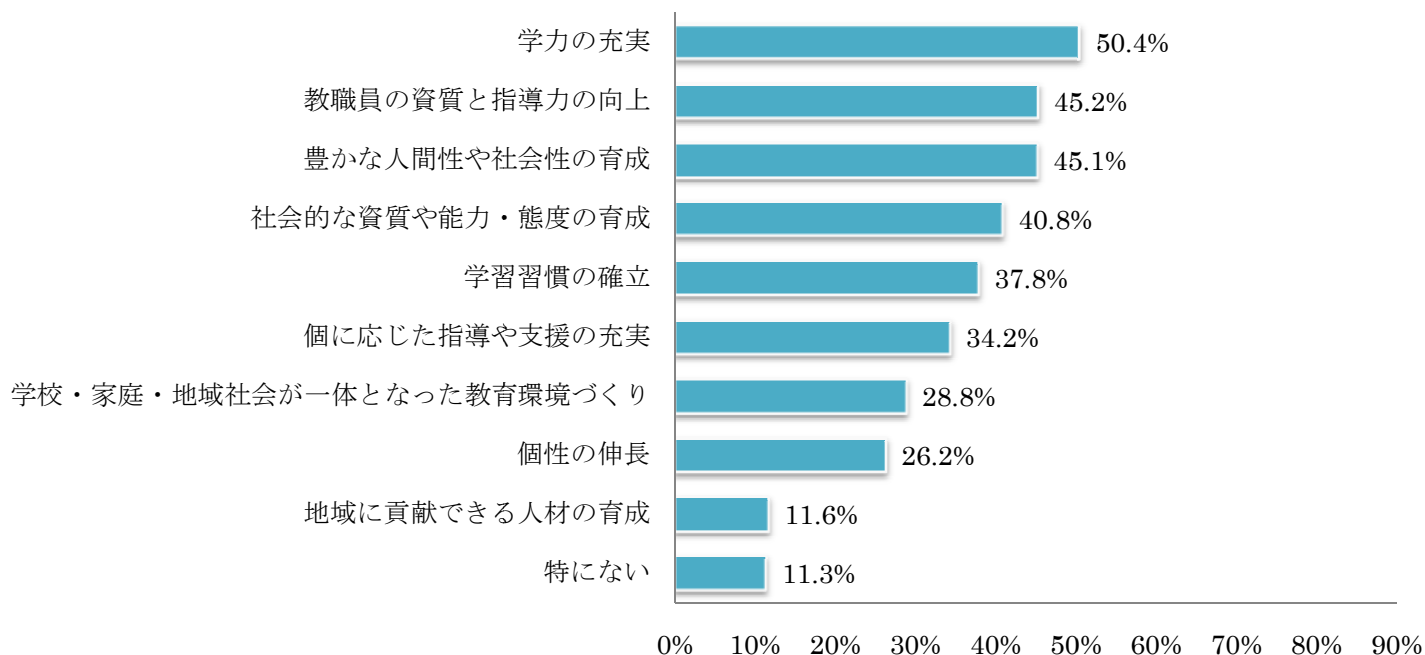


中学校2年保護者



【保護者（小学校4年～中学校2年総計）】

小中一貫教育を行うことによりどのような成果を期待しますか（複数回答）



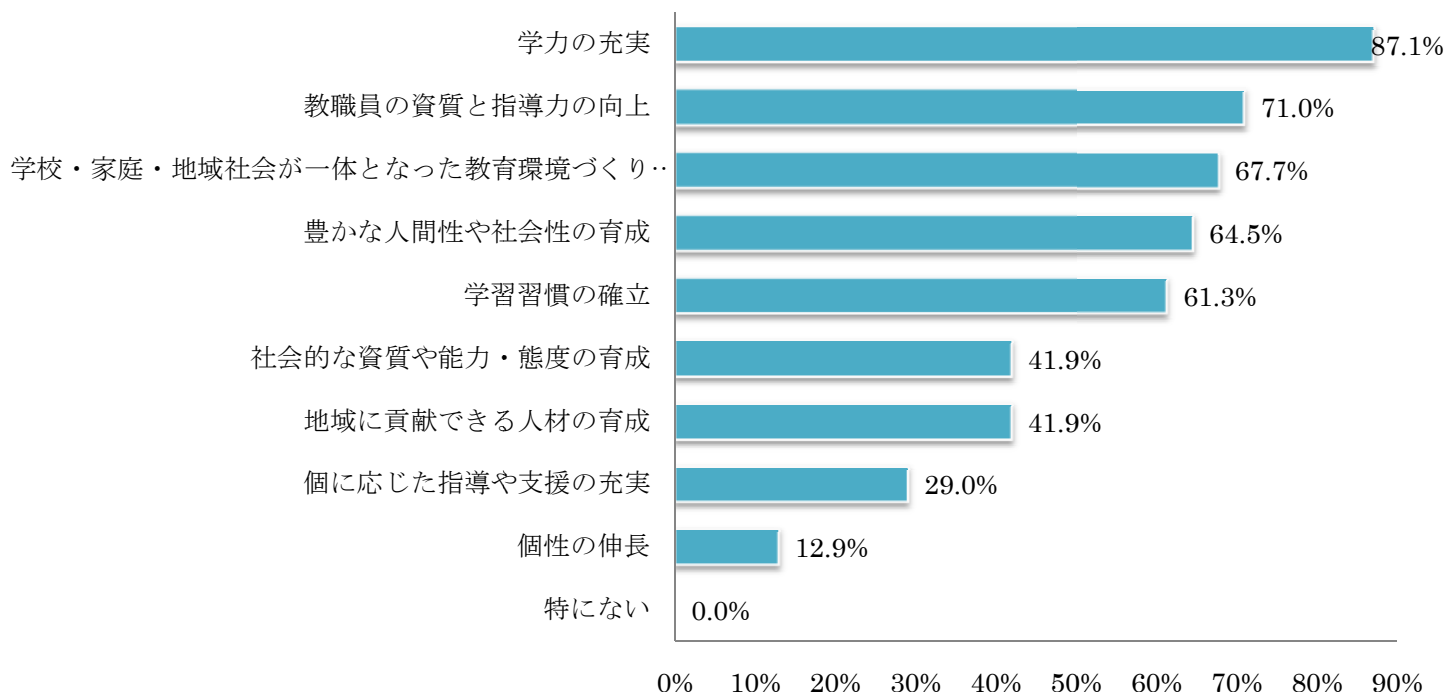
*保護者が期待する成果は学年によって順序に違いはあるものの「学力の充実」「教職員の資質と指導力の向上」「豊かな人間性や社会性の育成」の3項目が上位を占め、いずれにも5割程度の保護者が選んでいる。
また、この3項目に加え、「学習習慣の確立」と「社会的な資質や能力・態度の育成」「個に応じた指導や支援の充実」も、3割から4割程度の保護者が期待する成果として選んでいる。

【保護者】

○全体的に見ると、小中一貫教育の手法で得られる成果として期待するものはどの学年の保護者もほぼ同じ傾向であることが伺える。

学校 小中一貫教育を行うことにより、どのような成果を期待しますか。（複数回答可）

【学校】 小中一貫教育を行うことによりどのような成果を期待しますか（複数回答）



＊「学力の向上」を期待する成果として選んだ学校は9割近くにのぼり、「教職員の資質と指導力の向上」「学校・家庭・地域社会が一体となった教育環境づくりの推進」「豊かな人間性や社会性の育成」「学習習慣の確立」を選んだ学校は、それぞれ6～7割程度ある。

【学校】

○学校は小中一貫教育という新しい手段をもって「学力の向上」などを図ろうとしていることが伺える。

小中一貫教育の期待する成果は、小・中学校及び保護者においても、「学力充実」を第一として以下ほぼ同じ項目となっている。小・中学校教職員の交流や授業研究、合同研修などを通して、系統性や継続性のある学習指導と教職員の資質と指導力量の向上を図って学力充実につなげることが必要である。

「学習習慣の確立」について、学校は6割程度、保護者は4割程度の期待となっているのも、「学力の充実」につながる事項としていることが伺える。各ブロックでは、「家庭学習の手引き」「生活のしおり」を作成して、9年間を見通して自ら学び続ける学習習慣を育てるため、家庭と連携した取組をしている。また、授業の進め方と児童生徒の授業への関わり方を示して見通しを持った学び方を育てる取組もしている。これらを、学校と家庭と地域社会が一体となった教育環境づくりとともに進めていくことが必要である。